

澳國博覽會報告書 廿

鑛路部



特39

323

共廿本

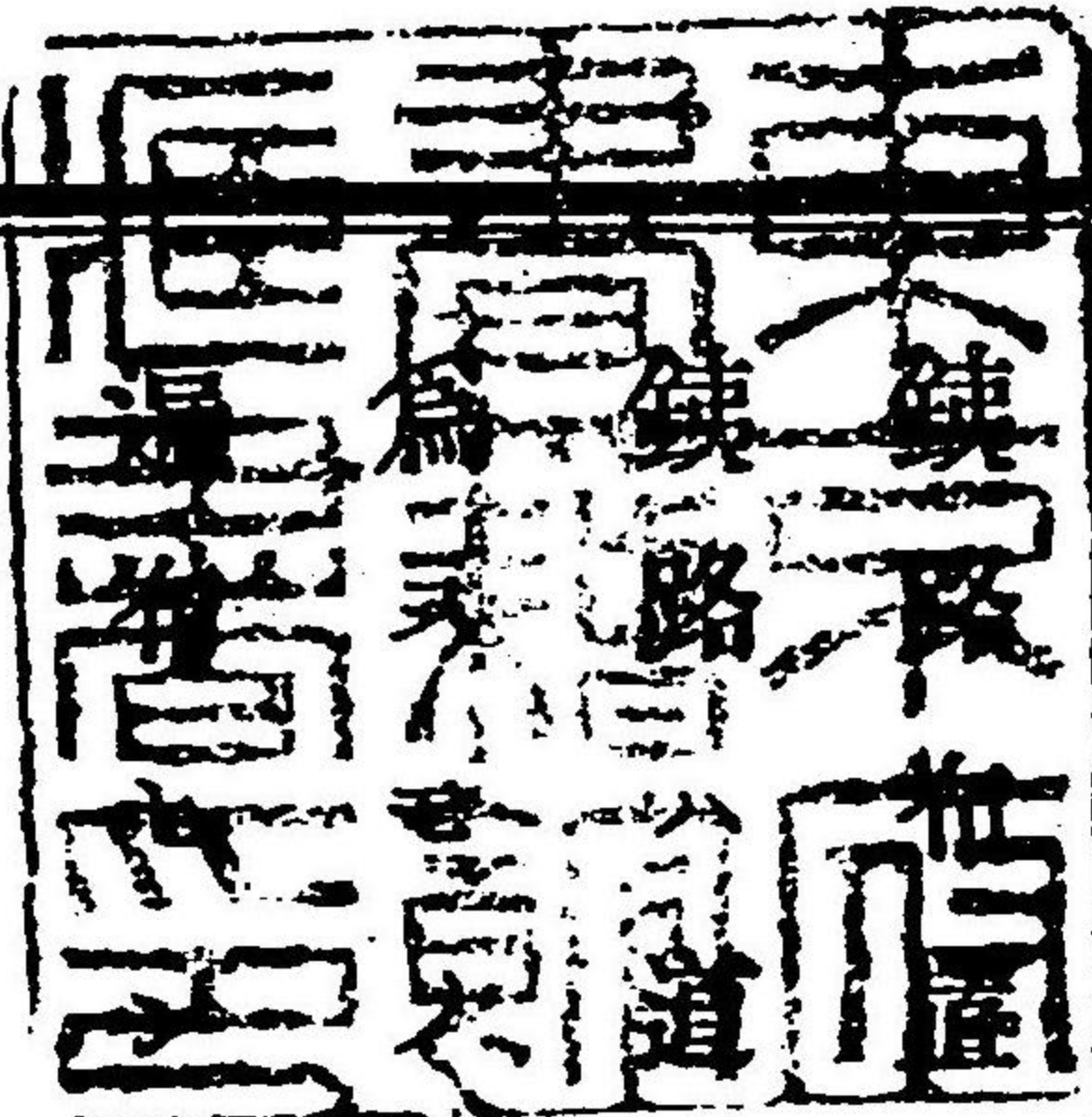


澳國博覽會報告書

鐵路部

夫レ萬國大博覽會ノ用タルヤ博ク各國ノ所爲ヲ察シ制規學藝ヨリ工業機械等ニ至ル迄其進歩改新日ニ精良ニ趨クノ狀ヲ視テ親シク之ヲ列品ニ徵シ深ク之ヲ著論ニ考ヘ其所長ヲ採リ之ヲ我國ニ資益スルニ在リ我事務局嚮ニ澳國博覽會ニ在ルノ日採集スル所ノ諸書ヲ譯成シ政府ニ上ツル者若干冊皆之ヲ印刷ニ附シ題スルニ澳國博覽會報告書ヲ以テシ各省使廳府縣ニ頒送シ其餘ヲ發賣シ遍ク全國ニ報知スルノ意ヲ表セントス然レモ其採集蒐集スルノ指ヲ示サバレハ人其要領ノ在ル所ヲ認視スル能ハス而シテ元副總裁佐野氏ノ報告書之ヲ舉述スル詳カナリ故ニ今併セテ之ヲ印刷シ各部ノ首ニ掲ケ以テ其序言ニ代フト云フ

明治八年八月 元澳國博覽會事務局官



鐵道ノ目的報告書

路水路ト利ヲ同ウシ相須ツテ用テ相ナリ道路ハ地ノ險易ヲ論セス國中ニムルヲ得ベク水路ハ運輸ノ價廉ニシテ又田野ニ灌溉シ沼池ヲ乾涸スルノ便ヲ助クヘシ來往神速ニシテ然モ行止期ヲ愆ラサルハ鐵路ノ他二者ニ優ル所ナリ是故ニ要港都府及工業盛大ノ地ハ必ズ鐵路ヲ設ケテ以テ往來運輸ニ便セザルヲ得ス其經濟上ニ益スル勝ケテ筭スベカラズ鐵路ヲ築クヤ原ト經濟ノ利ニ基

クベシト雖モ猶ホ一事ノ忽カセニスベカラザル者アリ曰ク何ゾ軍用ノ便是ナリ鐵路ノ神速ナル終朝ナラズシテ能ク大軍ヲ數百里ノ外ニ輸スベク其攻守ニ大千係アル猶ホ經濟上ニ於ルニ異ラズ故ニ鐵路ヲ築ク必ズ又軍用ノ便ヲ兼テ察セザルベカラス學國ノ如キハ夙ニ此理ヲ悟リ豫メ之ニ適スルノ制規ヲ定ム其佛ヲ破レル實ニ之ニ頼ルモノ少ナカラズトス我國土地肥沃物産ニ富ムト雖モ未タ其盛大ニ至ラサルハ往來運輸ノ不便ナルヲ以テ一大原因トス

尋常道路ノ制未タ備ラス鐵路ノ如キハ近來僅ニ數里ヲ創築セシニ過ギズ如何ゾ能ク物産ヲシテ自在ニ流通セシムベケンヤ且夫四面海ニ接シ海軍未タ振ハス万一外寇アル役兵艦ヲ以テ我航路ヲ斷タハ四方ノ應援守禦期機ヲ失フナキヲ保シ難シ實ニ憂フベキノ至ニシテ鐵路ノ我ニ必要ナル所以ソノ最要者ヨリ速ニ建築ヲ起スベキノ理ナリ臣愚以爲ク我國經濟軍用ノ便ヲ考フルニ全國ヲ縱貫スルノ線路ヨリ之ヲ横過スル者ニ及ブベク先ヅ東京ヨリ北青森

西京坂ニ達スルノ路ヲ開クベシト京坂以西ハ
内海通航ノ便アリ故ニ暫ク線路ヲ此ニ止ムベ
シ東北ハ海路甚ダ險ニシテ加之墳ヲ魯國ニ接
シ開拓ノ業方サニ急ナルヲ以テス故ニ必ス路
ヲ延テ青森ニ至ラシムベシ此二大線路功ヲ成
スニ隨ヒ新瀉敦賀等ノ要港大都ニ横線ヲ通シ
テ大線路ト相連結セシメ而シテ後地方ノ需要便
宜ニヨリ益々枝線ヲ設ケテ終ニ全國ニ縱横遍
布スルヲ期スベシ鐵路建築ノ方法ハ其類一ナ
ラズ利害得失モ亦隨テ異ナリ彼歐州ニ於ケル

モ或ハ政府自爲ヲ主トシ或ハ會社私築ヲ可ト
シ未ダ確定ノ説アルナシ若シ速成ヲ求メハ政
府ノミノ爲シ得ベキニ非ス必ス大會社ヲシテ
其事ヲ爲サシムヘシ然リト雖モ本邦今日ノ狀
世人未タ建築ノ事ニ慣レヌ又富盛ノ會社ナシ
故ニ政府先ツ之ヲ起シ他日漸次會社ニ賣與ス
ルノ策アルノミ其國家ニ必要ナリト雖モ營業
利少キノ線路ハ政府自ラ有シ若クハ會社ニ委
シ政府之ヲ保護資給セサルヲ得ス非常ノ際ハ
會社私有ノ路タリト雖モ亦ソノ管理ノ權ヲ以

テ一ニ政府ニ委スベキノ法ヲ設クヘキハ論ナ
 シ平時ニ在テモ常ニ軍官ヲシテ公私ニ論ナク
 鐵路ノ實況ヲ檢閲講究セシメ兵士乗車ノ規則
 等ヲ豫定スヘシ以國ノ如キモ近時政府一タヒ
 會社ノ鐵路ヲ買取シ新ニ經濟軍用ニ並ヒ適ズ
 ルノ法則ヲ設ケテ再タビ之ヲ會社ニ交付セン
 トスルノ議アリ是臣カ該國ニ在ルノ日親ク聞
 知スル所ナリ今鐵路建築ノ業ヲ行フ固ヨリ許
 多ノ洪費ヲ要スヘシ若シ之ヲ外國商社ニ委シ
 若干ノ權利ヲ與フヘキヲ約サハ彼資財ニヨリ

テ速ニ功ヲ就シ得ヘシト雖モ畢竟內國ニ益ア
 ルノ策ニ非ス故ニ政府其力ヲ盡シ已ムヲ得ス
 シハ國債ヲ益シテ以テ不足ニ充ツヘシ鐵路ノ
 業ノ如キハ一時洪費ヲ要スト雖モ功成ルノ後
 ハ利ソノ費ス所ヲ償フニ足リ且ツ全程ノ竣功
 ナ待ツテ須井ス隨テ成レハ隨テ開キ既開者ノ
 利ヲ以テ未開者ノ費ヲ助クルヲ得ベキナリソ
 ノ建築ハ外國技術士ノ力ヲ借ラサルヲ得スト
 雖モ內國人ノ其事ニ通スル者ノ之ト共カスル
 ナクシハ徒費徒勞多キヲ免レヌ故ニ其業ニ通

スルノ人ヲ養ヒ成スハ第一ノ急務ナリ宜ク稍
豫科ニ通シ畧建築技術ニ渉ル者數名ヲ擇ミ之
ヲ白國若クハ獨國ノ政府多ク鑄路ヲ有スルノ
地ニ差遣シ實際ニ就テ傳習セシメハ數年ヲ出
スシテ既ニ外人ト相助ケテ事ヲ爲スニ堪フル
ノ人トナルヘシ

臣千八百七十二年筭スル所全球上鑄路ノ計表
ヲ案スルニ英國ノ鑄路總程二万四千九百九十
五キロメートル獨逸二万二千九百十八佛一万
八千二百三十澳一万四千百〇三歐洲魯領一万

三千八百二十四白耳義三千百五十五荷蘭千四
百五十八米利堅合衆國十万〇七千九百九十二
アリ而シテ我日本ハ止々二十八キロメートル
ノミ今此計表ヲ見ハ歐米鑄路ノ盛復々臣カ喋
喋ヲ勞セズシテ瞭然タリ

臣歐ニ在ルノ日僚屬ヲシテ筆記譯述セシムル
ノ書鑄路ニ干スルモノ四アリ曰ク鑄道說以國
鑄道會社ノ狀師ウハレンナアニ氏ト對話ノ顛
末ヲ筆記セシムル者及同氏ヲシテ政府自爲ト
會社私築トノ利害ヲ筆記セシムルモノナリ曰

ク以國鐵路記事該國商務執政所贈書中ヨリ摘
譯スル所ニシテ其鐵路ノ景況ヲ示スモノナリ
曰ク澳國西北鐵道記事澳國ノ地タル頗ル山路
多クソノ鐵道建築ノ實跡或ハ我參考ニ供スベ
キヲ思ヒスカラ氏ヲシテ記セシムル所ナリ曰
ク中央亞細亞鐵道說近來歐人ノ中央亞細亞ニ
鐵路ヲ通ゼントスルハ尤モ我ニ干係アルヲ以
テ佛新聞ヨリ該件ニ干スル一條ヲ譯出セシメ
シモノナリ近口聞ク魯ハ少クソノ線路ノ方向
ヲ改正シテ既ニ建築ヲ起セリト以上四書今皆

成ヲ告ク謹ンテ以テ上進シ并セテ臣カ鄙見ヲ
陳ス伏テ冀クハ政府少ク意ヲ留メンヲ臣常
民誠惶頓首

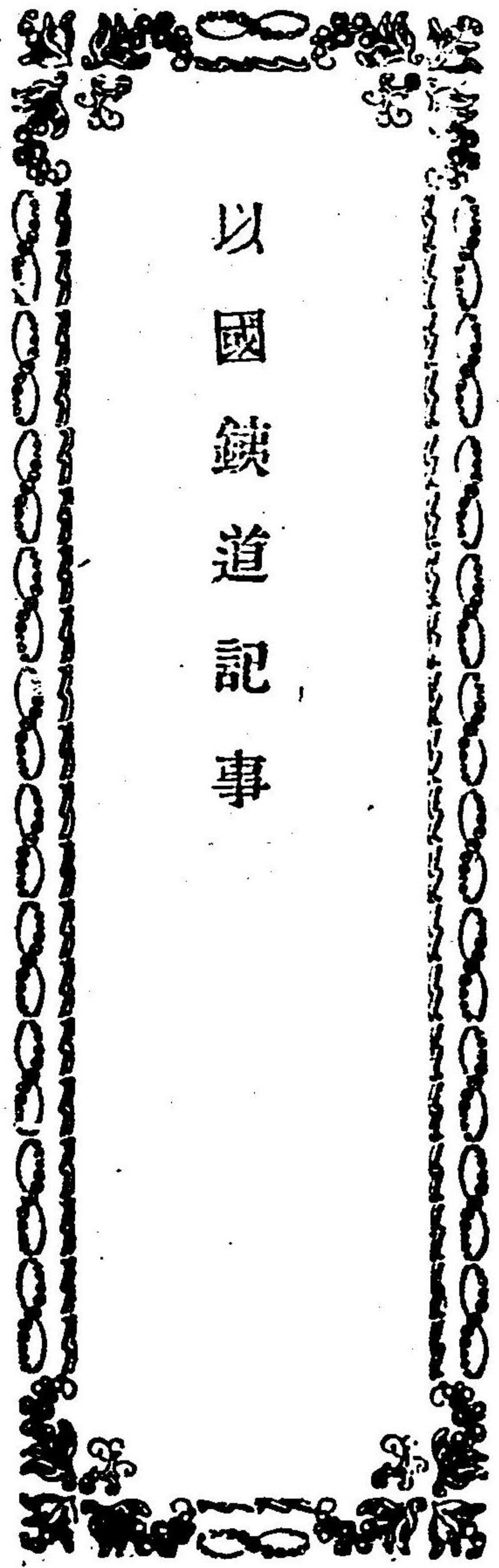
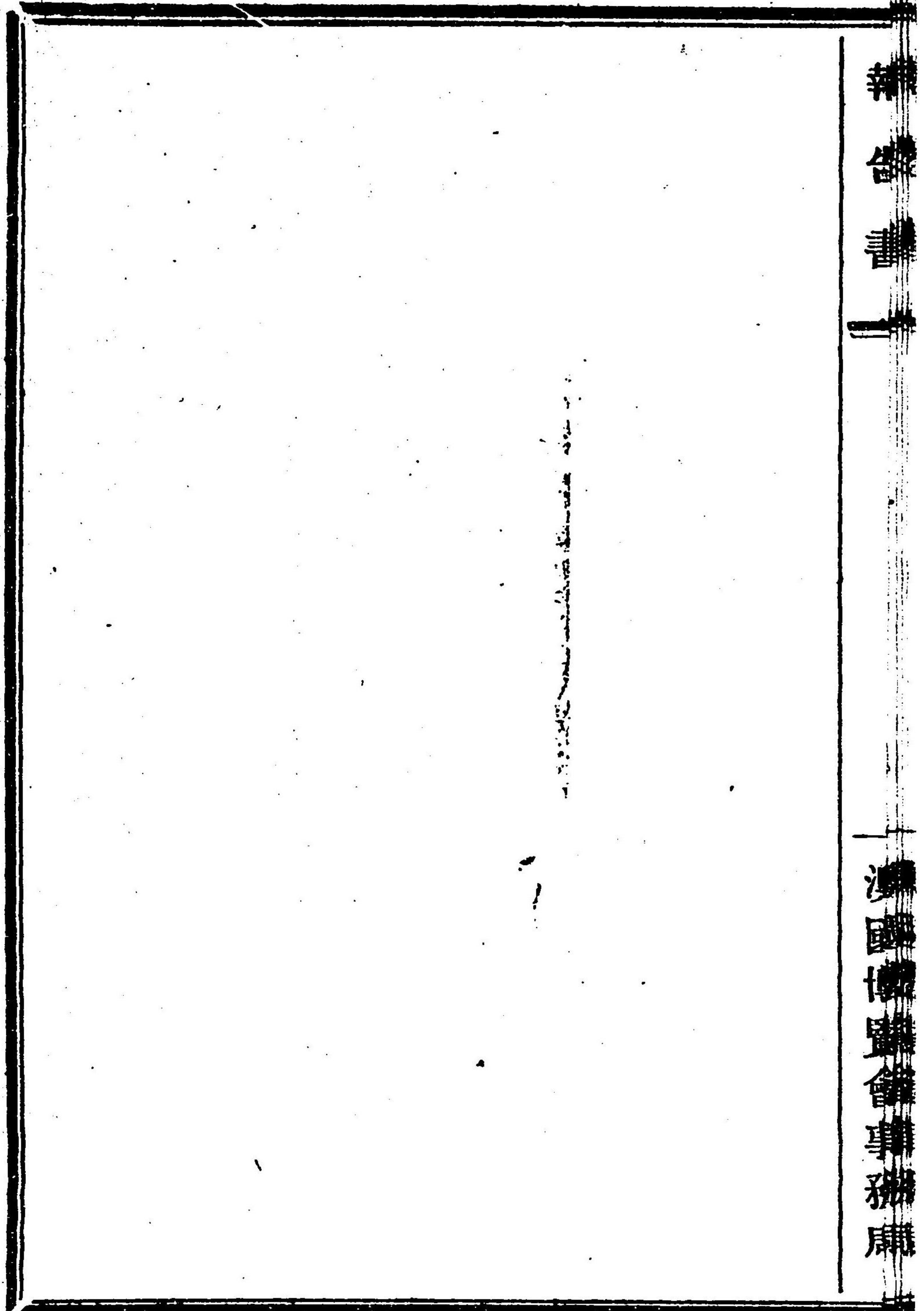
元澳國博覽會事務副總裁

明治八年七月

議官 佐野常民

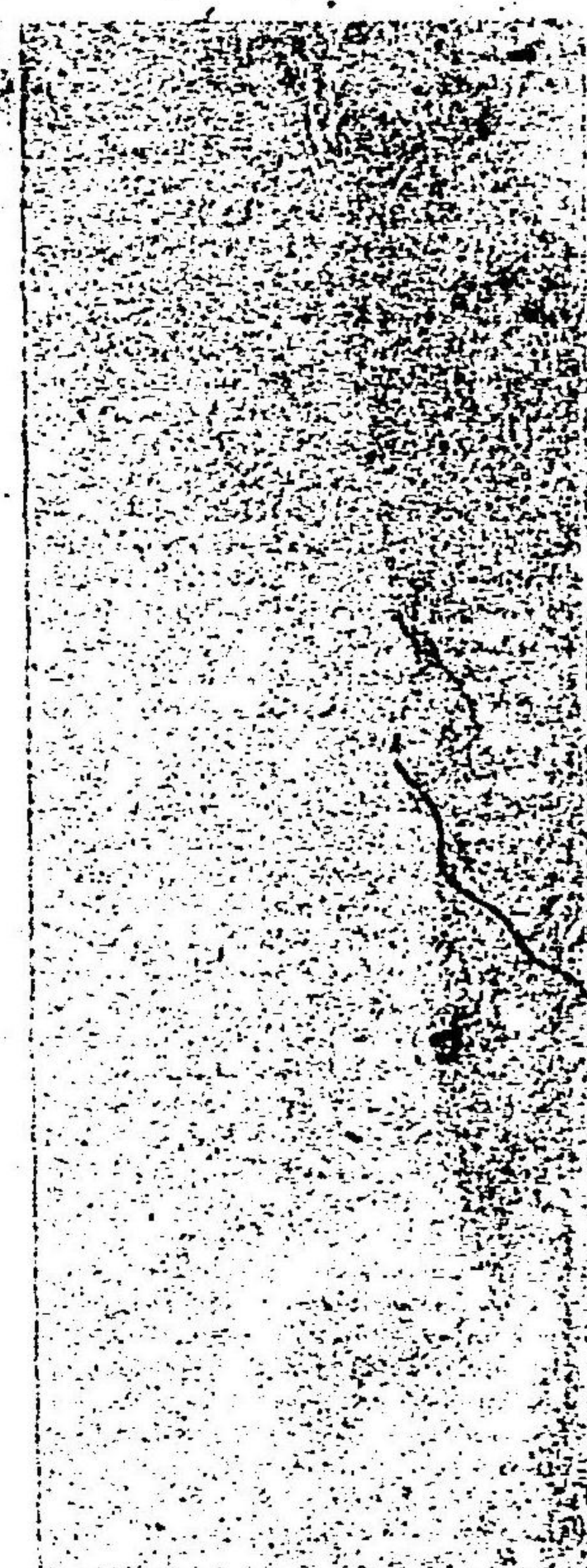
華
商
報

漢
口
博
覽
會
事
務
處



以
國
鐵
道
記
事

鐵道說



鐵道說

鐵道說

以國鐵路ノ事ニツキ佐野公使ウハレンナ

ニ氏ト對話ノ筆記一以國ニ鐵道會社ハ三

チ「境」トツテ北全西及第ニ中央會社

ハ「境」トツテ北全西及第ニ中央會社

有部會社ハ東海岸ニヨリ種南部ヲ占テ自ラ開

行ナスルモ

ウハレンフニ氏云フ近日我政府鐵道ノ事ニ付

新ニ法案ヲ設ケテ議院ニ下サントス子モ亦其

事ニ關シ頗ル繁忙ニ堪ヘス

佐野公使問 其新法ハ鐵道建築ニ關スルヤ將

博覽會 事務局

又鐵道事務ノ辨理上ニ關スルヤ
ウハレンナアニ答 我以國ニ於テ鐵道運輸ヲ
業トスル會社ノ一箇(中央會社)大ニ損耗ヲ爲シ
依舊營業スル能ハサルヲ以テ政府其事ニ關涉
シ往時會社ニ與ヘタル免許ヲ廢シ一時其鐵道
ヲ買取シ會社ノ株主ニハ五百ニ付七半ノ年利
ヲ給シ然ル後鐵路ハ新會社ニ賣ルカ又ハ政府
ノ有トシテ唯若干年間之ヲ會社ニ借與スルカ
二者其一ヲ行ハントス

問

聞ク歐州ニテハ政府自ラ鐵路ヲ有スル者

アリト果シテ然ルヤ

答 然リ自國ノ如キ是也又英國政府會社ノ鐵
道ヲ買取スルノ說アリシカ未タ實ニ之ヲ行ヒ
シヤ否ヲ聞カス元來歐羅巴ニテハ政府自ラ商
法ヲ爲サレルノ風ニテ英國ノ如キハ會社專横
ニ過キ運價ヲ隨意變更スル等ノ弊アルカ故ニ
國益ノ爲メ政府ニテ自ラ其事ヲ爲サントセル
ナリ佛字其他ノ國ニテハ政府自ラ之ヲ爲スヲ
欲セス是會社若シ善ク規則ヲ守リ公私便利ナ
レハ政府肯テ此事務ノ勞ヲ負フヲ欲セサルニ

ヨル

問 往年佛字戦争ノ節字國ニテハ鐵路運輸ノ事務沮滯ナカリシニ佛國ニテハ之ニ反シ此一事大ニ勝敗ニ關セルト云フ是字國ニテハ政府自ラ鐵路ヲ有シ佛ハ然ラサル等ノ事アリシニヨラスヤ

答 然ラス佛國ニテハ規則廢弛シ字國ニテハ法令善ク行レタルニヨル也然ノミナラス佛國ノ鐵道ハ專ラ經濟上ニ便スルヲ主トシ字國ノ如キハ軍馬ノ移轉輜重ノ運輸ニ便スルヲ主ト

シテ之ヲ築キタルニヨル唯京師ヨリ國境マテ直線ノ鐵路ヲ建築セルノミニテハ緩急ノ際事期ニ後ル、カ故宜ク縱横ニ線路ヲ布クヘキ也之ヲ要スルニ佛國ニテハ鐵路ノ事務沮滯セシハ左ノ二句ニ出テス第一鐵路ノ法則弛廢セシ事第二鐵路ヲ築クニ專ラ經濟上ニ基キ却テ軍用ヲ忽セニセル事

問 前説ノ如ク會社ヲシテ鐵路ヲ築カシメンニハ會社ハ己利是視ル者ナレハ建築方ヲ粗ニシ軍用ヲ顧リミス水利ニ干セス或ハ妄リニ運

價ヲ變更シ到底國益ニ害シ政府ノ自ラ鐵路ヲ
作ルノ便ナルニ如カスト思ハルソノ利害果シ
テ如何

答 歐土ニ於テモ其論ナキニ非ス政府鐵路ヲ
作ルヲ便トスル説ヲ白耳義説ト云フ實ニ長遠
ナラサル鐵路ナレハ政府自ラ之ヲ作ルモ可ナ
ルヘク費用ハ多カルヘシト雖モ建築方堅固ナ
ルノ利アルヘシ然レモ今遠長ノ鐵路ヲ築クニ
方リ政府如シ自ラ其事ニ任セハ費用洪大徒ラ
ニ國債ヲ増シ其發行セル證券ノ價ヲ減スルニ

至ラン如カス大富榮ノ會社ヲシテ之ヲ爲サシ
メンニハ然ル時ハ鐵路事務ノ辦理監察方却テ
整フヘシ又水利軍用ニ便センカ爲メニハ元來
會社ニテ鐵路ヲ布クニハ必ス政府ソノ線路ヲ
檢査シ國土ノ利害ヲ熟察シテ後ニ非スンハ許
可ヲ與ヘス且一タヒ許可セル後ト雖モソノ害
アルヲ察スル時ハ相當ノ價金ヲ出シテ再ヒ線
路ヲ改正セシムルノ權ヲ持スヘシ運價ヲ變更
スルノ弊ヲ防クニハ政府會社ト條約ヲ爲シソ
ノ定價ヲ減スルハ適意タルヘク之ヲ増スヲ禁

ストノ規則ヲ設クヘシ

問 白國ノ鐵路ハ悉ク政府ノ有カ將會社ノ有

カ

答 白國ノ鐵路ハ悉ク政府ノ所築ニ出ツ四五

年前其幾分ヲ會社ニ讓ルノ説アリシカ未タ結局ヲ聞カス同國ハ石炭鑛鐵ニ富ムヲ以テ他國ニ比スレハ鐵道ヲ築クト廉ニシテ且堅タシ上ノ問答了リタル後ウハレンナアニ鐵道建築ノ大規則ニツキ左ノ説ヲ述ベタリ
予鐵路ノ事ニ干スル茲ニ十七年博ク歐州各國

ノ法制ヲ熟察シ且予ノ實驗ニヨリテ之ヲ觀ルニ大抵眼目トスヘキ事四條アリ第一鐵路ヲ作ル時ハソノ線路ヲ定ルニ方リ貿易經濟ノ利ト攻戰守禦ノ便トヲ熟察スヘキ事

今貴國ニ就イテ之ヲ言フニ假令ハ兵庫大坂ノ間ニ鐵路ヲ布クニ方リ一條ハ海ニ沿ヒ一條ハ山ニ沿ヒ萬一敵兵一條ヲ斷ツモ他ノ一條以テ運輸ヲ爲スニ足ラシムル如キ是也第二政府ヨリ會社ニ鐵路建築ノ許可ヲ與フル時必ス條約書ニ平時政府ヨリ命セラレタル士官ニハ鐵道

一切ノ事ヲ研究セシメ戰時ハ鐵路ノ掌管ヲ全ク政府ニ委スヘキヲ
 此條甚タ緊要ナリ此二件ヲ約セル後ハ鐵路ハ會社ノ有ナレモ政府ノ有ナルト異ナラス往年佛字戰爭ノ時字國ニテ爲シタル所ヲ見ルニ同國ニテハ戰爭前ヨリ此法既ニ行ハレシ者ト見ユ佛國及我以國ニテモ方今專ラ此法ヲ施行スルノ說アリ第三平時常ニ軍士輩ヲシテ國中鐵路ノ事ヲ研究セシムル事
 此研究方ハ分テ二種トス第一種ハ全ク參謀官

ノ任ニシテ即某地ニ戰ヒ起レハ某地ノ鐵路ヲ以テ出兵スヘク某所ニ鐵路ヲ布クハ某國ト戰爭ノ時必要ナル等ヲ研究スルニアリ第二種ハ之ヲ熟察セル後平常上下士官ニ命シテソノ鐵路ヲ實地檢査セシムルニ在リ然レモ兵卒ニ至ルマテヲシテ之ヲ爲サシムル時ハ費用多クシテ且徒勞ニ近キヲ以テ唯一隊中鐵道脩繕ノ細事ヲ熟知スル者數人アラシメハ非常ノ際用ヲ缺クヲナカルヘシ第四軍中ニ規則ヲ設ケ豫メ非常ノ際軍士乗車ノ規則ヲ定メ一旦事アレ

ハ軍士立口ニ發程シテ毫モ混雜ナキヲ期スヘク又當ニ鐵路ノ事ノミナラス電信ノ事ヲモ研究セシムルヲ要スル事

此電信ノ一事極メテ緊要ニシテ往年澳以戰爭ノ時千八百六十六年ヒマツ以將某電信ヲ同國ノ將某ニ送リシニ電信會社ノ者澳國ニ左祖セルニヨリ之ヲ敵將ニ贈リシヨリ不意ノ大敗ヲ取レリ電信ノ一件ハ騎兵ヲシテ研究セシムルヲ可トス學國ノ騎兵ハ善ク電信ノ裝置脩繕方ニ長スル者ナリ以上四條ハ最注意スヘキ重

件ニシテ上文ニ説キタル政府或ハ會社ニテ鐵路ヲ作ルノ利害得失ニ至リテハ歐州ニテモ著書甚タ多ク衆說紛々タリ白人ベツケル氏ノ書ノ如キハ議論精明ナレトモ偏ニ政府鐵道ヲ築クノ説ヲ主張スルモノナリ又會社ハ頻リニ金ヲ散シ著述家ヲ備ヒテ會社ヲ助ルノ書ヲ頒布ス此類尤佛國ニ多シ會社ニ建築許可ヲ與フルノ方モソノ類一ナラス政府自ラ線路ヲ定メ地固メヲ爲シタル後會社ニ委シテ鐵路ヲ布カシメ開業ノ日利少ケレハ政府之ニ資給スヘキヲ約

スルアリ或ハ政府唯線路ヲ定メ其餘會社ニ委
シ開業ノ上出金入金ヲ超ユル時ハソノ不足ヲ
補フヲ約スルアリ元來開業ノ後利多キ地ナレ
ハ政府ノ資給ヲ要セサルハ無論ニシテ若シ國
益ノ爲メ開業利少キノ地ニ鐵路ヲ設ケルニ方
リ會社之ヲ作り政府之ニ資給スルナレハ政府
ノ損失アルハ言ヲ俟タス上文ニ云フ政府ニテ
地固メテ爲シ線路ヲ布クハ資給金ニ代フルナ
リ資給金ヲ與フルノ法ハ何「キロメートル」ニ付
何程ノ利アラハ何程ノ資給金ヲ與フヘク何程

ニ至レハ資給金何程ヲ減シ何程ニ至レハ全ク
資給金ヲ廢スヘシトス故ニ會社ノ業繁昌シテ
入金多キ時ハ政府之ニ資給スルヲ要セサルノ
ミナラス又運輸ノ稅ヲ徵スルノミトナル也方
今貴國盛ニ鐵路ヲ開ク冀クハ善ク歐洲經驗ノ
事跡ヲ鑑シ弊害ナキノ處分ヲ施サンヲ然ラ
スシテ若シ漸ク逐ハス一時ニ業ヲ興ントセハ
必ス工銀ノ騰貴ヲ醸シ經濟上ノ變動ヲ起スト
必然ナレハ萬々注意誤舉ナカランヲ期スヘ
シ

政府或ハ會社ニテ鐵路ヲ布クヘキノ利害論

今茲ニ一政府アリ鐵路ヲ國中ニ布ントセハソノ採用スヘキ方法三アリ

第一 政府自ラ鐵路ヲ作り且自ラ之ヲ開行ス

第二 政府鐵路ヲ作りシ後會社ニ委シテ之ヲ開行セシム

第三 政府會社ニ許可ヲ與ヘテ鐵路ヲ作り且之ヲ開行セシム

第三方ヲ用ウル時ハ其施行ノ道甚々多シテ今

爰ニソノ大者ヲ述フヘシ

甲 政府ヨリ會社年々ノ利金ヲシテ若干ニ下
 ラサラシムヘキヲ保證スル事此方ハ不便ノ
 多シ入金ヨリ出金ヲ除去シ莫ノ利金ヲ定メ其
 正實ナルヲ證スルニ方リ往々會社ト政府トノ
 間ニ爭論ヲ生シ重大ノ事件ヲ引起スノ弊アリ
 然ノミナラス若シ鐵路ノ利金政府ノ保セル額
 ナ過キサル時ハ會社ソノ業ヲ盛ンニスルヲ欲
 セサルノミナラス却テ其盛大ニ趣クヲ妨クル
 ヲアリ其故ハ益入費ヲ増スノミニテ利金ヲ増

スノ目的ナク徒ラニ政府トノ爭論ヲ開キ損亡
 ナ招クヲ以テナリ

乙 政府ハ會社ノ費用幾何タルヲ論セス毎年
 入金ヲシテ若干タラシメンヲ保スルヲ此方
 ハ前者ニ比スレハ稍可ナリトス唯入金ノ額増
 加シテ若干ニ及ヘル時ハ最初ノ約ヲ變改スル
 ナ可トス是實驗ニ基キタル確説ナリ

丙 政府ヨリ預メ期限ヲ定メテ會社ニ資給金
 若干ヲ給スル事米國コチハ實給金ニ代フタル會
 社トアリ又政府ニテ作レル建築物ヲ會社ニ

與ヘテ資給金ニ代ルモ亦一方ナリ然ル時ハ其價ヲ責メヌ或ハ會社ノ利金増加シ建築入費ヲ復シタル後ニ至リテ之ヲ消却セシムルノ約ヲ爲スコトアリ

政府ニテ自ラ鐵路ヲ作り之ヲ開行スヘキノ説ヲ主張スル者ハ特ニ左ノ條件ヲ唱フ

白國政府初メテ鐵路ヲ築ケル時ハ鐵石炭ノ價英ニ比スレハ更ニ貴カリタレハ一キロメートル平均十三萬弗ニテ築キ得タルノ例ヲ舉ク

此功ヲ獲ルタメ白國ニテ用井タル方法ハ何國ニテモ用ウルヲ得ヘキモノニシテ即チ土功ノ類ニ應シ要用物ノ品ニ從ヒ時々適宜ノ方ヲ採用シテソノ事ヲ理スヘク都テ工事ヲ一人ニ任セスシテ數人ニ分命シ且仲人ノ手ヲ經スシテ直ニ製造人ヨリ品物ヲ買ヒ取ルヲ可トス此方ハ政府ノ費用ヲ減スルノミナラス又人世ニ益アリ其故ハ工事ノ全部ヲ一人ニ任セス幾多ノ工人ニ分命スルハ貧富ヲ平均スルノ道ニ合スレハ也是ヲ以テ明智ノ

政府ハ些少タリ此貧富平均ノ意ヲ先ニシ
工業ノ大機關タル會社ヲ盛ニスルヲ後ニ
スヘシ元來會社ノ盛ンナルハ人ヲシテ勉強
節儉ノ意ヲ起サシメテ永ク國家ニ益スルノ
道ヲ開カス却テ一時證券ノ時價ヲ見テ狡猾
利ヲ射ルノ弊風ヲ醸スヲ多シ
前條ノ説ヲ主トスル輩ハ平時幾多ノ兵士ヲ
シテ坐食セシメンヨリハ其力ヲ借リテ鐵道
ノ工ヲ助ルモ可ナリトノ説ヲ發スル者アリ
又假令政府全國ノ鐵路ヲ悉有セサルモ國土

防禦ニ必用ノ分ハ決シテ會社ニ委スヘカラ
ス會社ハ外國ノ金ヲ以テ立ツモノナラス一
旦事アルニ臨ミ外國ト金銀ノ關係アリテ進
退維谷ルノ事情ニ及フヲアリ又會社ハ自然
己利ノミヲ求メ政府ノ便ヲ願リミス故ニ年
々政府ヨリ資給ヲ受ル會社ハ常ニ之ヲ恃ミ
鐵路ヲ盛ニスルヲ欲セス却テ之ヲ妨ケ己
利ヲ先ニシ國益ヲ後ニスル者其例少ラス又
會社ハ政府ノ爲メ極メテ危險ナル補助者ニ
シテ彼商業盛ンナレハ大力ヲ得テ政府之ニ

頼ラサルヲ得サルノ勢ヲナシ及ヒ會社益富
榮ニ趣クニ從ヒ政府ノ助ケヲ要セサルヨリ
漸ク鐵路ノ事務ニ於テモ政府ノ指令ヲ奉セ
サルニ至ル又會社ノ商法利ナク不慮ノ事ニ
ヨリ若クハ掌管者ノ過失ニヨリ損亡ヲ爲ス
時ハ到底政府其弊ヲ受ケ會社ノ債主等ノ損
失ヨリ經濟上ノ變ヲ生シテ國家ニ害センコ
ト防クカ爲メ洪大費用ヲ爲スコトアリ
政府ヨリ會社ニ免許ヲ與ヘ鐵道ヲ作ラシムル
ニ如カスト云フ者ハ左ノ條件ヲ主張ス

第一會社ハ政府ニ比スレハ遙ニ鐵路建築開
行ノ事ニ長スト云フ實ニ政府ノ官吏ハ敏達
ナルモノナキニハ非スト雖モ年老ノ者多ク
偏ニソノ年壯ノ時流行セシ舊風ヲ固守シ苟
モ新奇ノ發明ヲ爲シ自力ヲ以テ身ヲ立ルノ
念薄シ故ニ政府ハ人ヲシテ自ラ勉メ自ラ奮
ヒ斷ヘス進歩ノ道ニ入り既得ノ功ニ基キテ
益々新工夫ヲ凝ラシ一層高上ノ効ヲ求メン
トスルノ策ニ乏シ會社ニ至リテハ然ラス現
在利益ヲ起スノ必要ナルニ牽カレ自然事務

ニ練達シ新法ヲ求ムルニ至ルソノ使役スル
人員モ亦身事ノ浮沈ハ唯奉務ノ勤否ニヨル
ヲ知リ常ニ新工夫ヲ凝ラシ會社ノ利ト公衆
ノ所用トナ合セ考ヘテ鐵道事務諸類ノ辨理
方ヲ漸々良善ニ趣カシメントス
又會社ニ許可ヲ與ヘ之ト條約ヲ結フ時ハ萬
一會社利ヲ失フ事アルモ政府ニテ擔當スヘ
キ費用ノ多寡ヲ預知スルヲ得ヘシ却テ政府
自ラ鐵路ヲ作ル時ハ技術士ノ算用ヲ誤リ或
ハ俄ニ時價ノ變異シタルカ其他ノ變事ニヨ

リ又ハ非常ノ脩復等ニヨリ莫大ノ雜費ヲ生
スル事アリ
今最大眼目ノ事ヲ説クニ若シ政府ハ速ニ鐵
路ヲ開クヲ要セス唯相當ノ金ヲ借り徐々ニ
之ヲ作ルヲ得ヘキ場合ナレハ政府自爲ノ說
モ價ナシトハ謂フヘカラス然レモ宇内各國
相競ヒ速ニ鐵路ヲ盛シニセンコトヲ務ル日ニ
方リテハ先ツ經濟上ノ利害ヲ先ニスヘシ此
件ヲ先ニスル時ハ工事ヲ會社ニ委スルノ便
ナルヤ智者ヲ俟テ後知ラサルナリ實ニ此

方ヲ用ウレハ政府洪大ノ金ヲ費ヤサス唯自
己ノ保證シタル利金若干ヲ年々給與スルニ
過キス曾テ漸々國債ヲ増シ民ノ信ヲ失フニ
至ラス國債愈増スニ從ヒソノ利子益高キニ
至ルハ無論タリ却テ會社ト條約ヲ結フ時ハ
ソノ信ニヨリテ己ノ信ヲ増シ又外國ノ金ヲ
自國ニ引クノ方術トモナルヘシ元來政府自
ラ鐵路ヲ築クモ力ノ及フ所界限アルハ經驗
ニヨリテ明カナリ譬ヘハ白國ノ如キハ始メ
自築ノ鐵路七百キロメートルナルニ後來會

社ニ許可セル新路ハ長之ニ過ルニ至レリ又
獨逸政府ハ昇平ノ久キ國帑富盛ナルニヨリ
全國一般ノ利害ニ關スル分ノミ自ラ之ヲ作
リ唯各地方ニ關スルノミ小路ハ會社ニ委
セシカ澳國政府ノ國帑虛耗スルニ至リテ乍
ナ此法ヲ廢シ全ク反對ノ說ヲ用井英佛ノ風
ヲ學ヒテ新路ハ會社ニ委シテ之ヲ建築セシ
メシノミナラス自カラ作レル者ヲモ之ニ委
スルニ至レリ又ビエモン政府ノシエーヌ府
ヨリナユラン府マテ鐵路ヲ建築セル如キハ

全ク不得已ニ出テ此建築ハ費用多ク會社之
ニ任スル者ナキヲ熟知セル後始メテ著手セ
ルモノナリ
會社過大ニ至ルノ弊會社政府間利害相反ス
ルノ害國土防禦ニ便ナラサル事等ハ之ヲ禦
ク難キニ非ラス結局ノ時會社ノ入金若干ニ
至ラハ政府ヨリ之ヲシテ多費ノ新路ヲ建築
セシム可キ事ヲ定メ或貿易ノ爲メ便利ノ條
件ヲ約シ或ハ雙方ノ便トナルヘキ方法ヲ以
テ資給金ヲ約シ又平時政府ハ軍士ヲシテ鐵

路事務ヲ研究セシムルノミナラス戰時ハ鐵
路トソノ附屬品電線トヲ併セテ自己ノ掌管
ニ委セシムルノ權アル事ヲ約記スルヲ以テ
上文ノ弊害ヲ防クニ足ルヘシ戰時會社ノ所
有物ヲ政府ニテ管理スル時ハ相當ノ償金ヲ
與フヘキハ言ヲ俟タサル也

新橋竹川街十七番地藝文社刊行

新橋竹川街十七番地藝文社刊行

以國鐵道記事

鐵道ヲ建築開行スルニ付政府ヨリソノ營業者ヲ救護スル事

第一 千八百六十九年一月四日ノ條約ニ於テ「ポストレノ」ヨリ「バルトンチー」シユ「マテ」鐵道ヲ設クルニ付政府ト北部會社ト結ヒシ約件中政府ハ此建設費用ノ資給トシテ同社二千二百萬弗ヲ千八百八十二年マテ三期ニ給與スヘキ事ヲ定ム

又千八百七十年八月二十八日ノ法則ヲ以テ「マ

ヤ「ヨリ」コロナ「マ」テ鐵路建設ノ爲メ「ブリ」アン
 テ「ア」會社ニ四十萬佛ノ資給金ヲ與フルヲ約ス
 第二 政府ハ鐵道會社「マ」レンム「オリ」ボルボ「マ」チ
 ニ同社ヨリ發行スル株證券ニ付五分ノ利アラ
 シムルヲ保證シ又九十九年ノ期限中ニ漸次消
 却方ヲ以テ元金ヲ拂フ專ヲ保ス
 第三 千八百六十一年七月二十一日ノ法則ヲ
 以テ「ボ」ロンヤ「ヨリ」アン「コー」ヌ「マ」テ鐵路一キロ
 メートルニ付二萬佛ノ利潤アラシメン「ト」テ保
 ス接利潤ヲ保證スルハ某會社今年二萬佛ノ
 入金アリテ五千佛ノ出金ナルニ若政府該社ノ

シニ殘利二萬佛ノ利ニ及フナルヲ要スル金額五去
 佛キナ給リス
 第四 前條ト同時ノ法則ヲ以テ「ブ」レシ「ア」ヨリ
 「ク」レモナ「テ」歴「バ」ピア「マ」テノ鐵道一キロメー
 トルニ付少クモ二萬五千佛ノ入金ヲ保證ス
 第五 數次ノ法則ヲ以テ鐵道會社發行ノ株證
 券ニ代ヘ政府ヨリ與ヘタル國債證書若干ヲ國
 債簿ニ記入スル「ト」テ定ム按此條ハ即チ會社
 債簿ニ記入スル「ト」テ定ム鐵道會社ノ
 第六 千八百六十二年ノ法則ヲ以テ「ブ」アン「コー」

法蘭西鐵道會社
 二
 鐵道會社

ヌ「ヨリ」オトラント「マデ」バリ「ヨリ」タラント「マテ」
 「フホシア」ヨリ「ナツ」アル「マテ」「チ」プウ「ア」ニ「ヨリ」ウ
 エスカラ「マテ」部ノ鐵路ハ一キロメートルニ付
 毎年二萬九千佛ノ入金ヲ保シ「ウ」オグヘラ「ヨリ」
 「マ」アラ「マテ」部ノ鐵路ハ一キロメートルニ付二
 萬佛ヲ保シタリ
 第七 千八百六十三年一月四日ノ法則ヲ以テ
 「セ」メンツ「ア」社ニ九十九年間「カ」グリ「ア」リ「ヨリ」オ
 ニスタノ「迄」カ「グ」リア「リ」ヨリ「イ」グレンシア「マテ」オ
 リスタニ「ヨリ」オ「ナ」ー「リ」マ「テ」オ「ナ」ー「リ」ヨリ「ボ

ルトドツレ「マテ」オ「ナ」ー「リ」ヨリ「ニ」ラ「マ」オ「バ」レ「マ」
 テ以上「智」鐵路丁ノ鐵路ノ開行ヲ許シ且年々一キ
 ロメートルニ付九千佛ノ利潤ヲ保セリ
 第八 千八百六十五年ノ法則ヲ以テ左ノ諸件
 ヲ許ス

- 甲 中央會社ニ凡ソ同社ニ許可シタル鐵路
 ニ付年々入金一キロメートルニ付一萬
 二千五百佛ニ至ラサル間ハ一萬三千二
 百五十佛ヲ資給金トシテ與フル
- 乙 北部會社ニ政府ヨリ同社ニ委託シタル

鐵路ト諸小鐵路會社ヨリ之ニ委シテ開
行セシムル鐵路トテ併セテ毎年二萬八
千佛ノ入金ヲ爲スニ不足ノ分ヲ給與ス
ヘキ事

丙

南部會社ニ千八百六十二年八月二十一
日ノ法則ヲ以テ毎年一キロメートルニ
付二十九萬佛ノ入金ヲ保セシハ之ヲ廢
シ新ニ左ノ條件ヲ定ム
千八百六十五年ヨリ千八百六十八年マ
テ入金ノ多少ニ拘ラス毎年一キロメー

トルニ付二萬二千佛ヲ給スヘキ事
千八百六十九年後ハ入金一キロメー
トルニ付七千佛ニ至ラサル間ハ二萬佛ノ
資給金ヲ與ヘ若入金此額ヲ過クル時ハ
ソノ過額ノ半ニ當ルタケ資給金ヲ減ス
ヘキ事
右ハ一キロメートルノ入金一萬五千佛
ニ至ラサル間之ヲ行フヘシ此額ニ至
ル後ハ資給金二萬佛中唯七千佛ヨリ萬
五千佛マテ過額ヲ減去スルノミナラス

又一萬五千佛ヲ過ル分ヲモ引去ルヘシ
右ノ規則ハ入金漸々増加シテ資給金ヲ
與フルニ及ハサルニ至ルマテ施行スヘ
キ事

第九 千八百七十年八月二十八日ノ法則ヲ以
テ南部會社ニ「フオシア」ヨリ「カンテラ」マテ鐵路
建築入費ノ資給金トシテ七萬佛ヲ與フルヲ約
ス

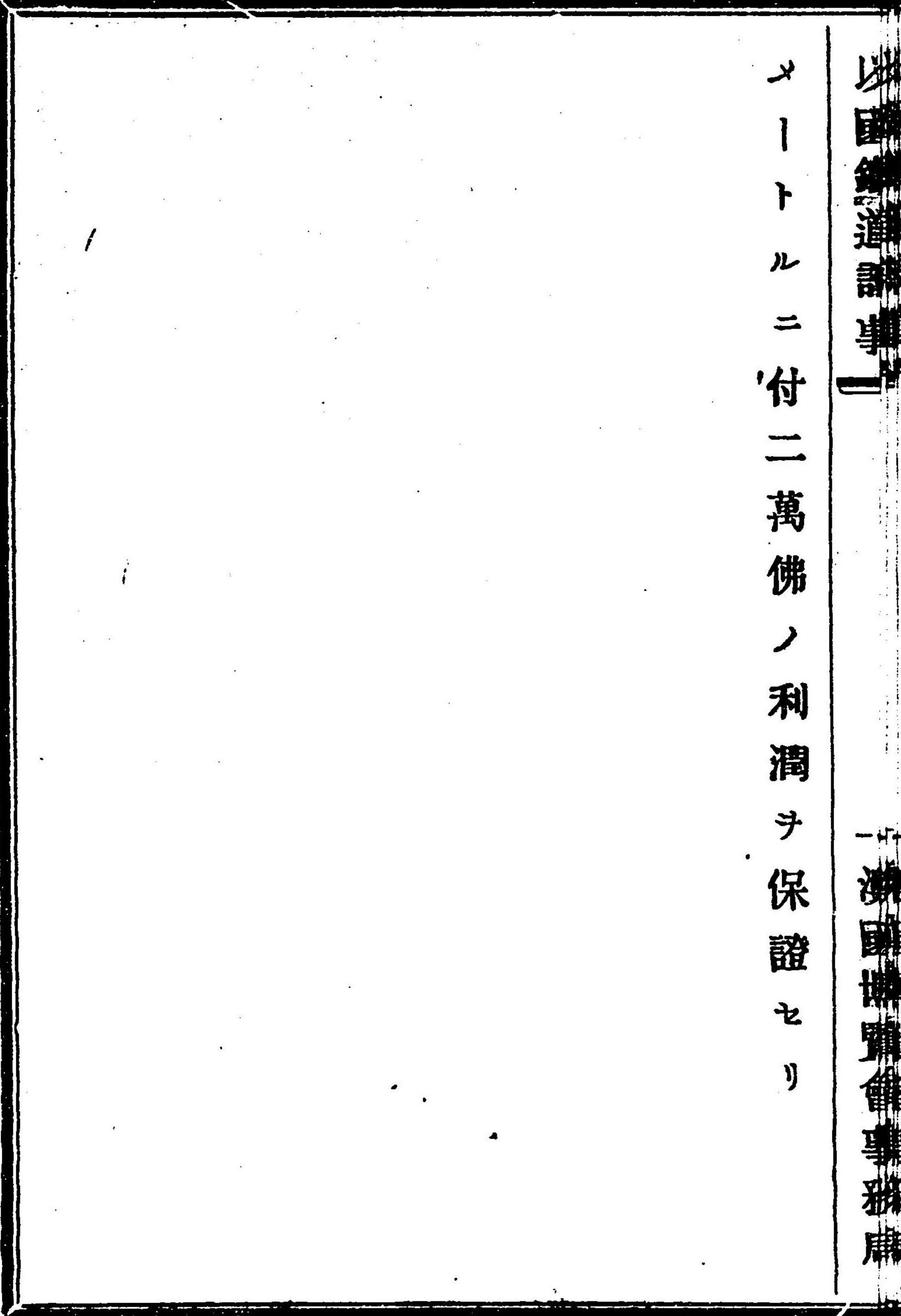
又「ダビード、レビー」社中ト「ポー」河上ニ假橋及本
橋ヲ設クルノ入費及「マントウ」城ヲ通過スル

鐵路ノ建築入費ノ半ヲ給スヘク且ツ如何ナル
場合ニ至ルモ政府ノ資給金二百萬佛ヲ過クヘ
カラサルヲ約セリ是「マントウ」鐵道ノ鐵路ナリ

第十 千八百七十二年三月二十四日ノ詔ヲ以
テ「シヨゼフサセルドナー」氏ニ委シテ開行セシ
メタル「クレモナ」ヨリ「マンツ」マテノ鐵路一キ
ロメートルニ付一萬八千九百七十四佛ノ入金
ヲ保證セリ

第十一 千八百七十二年七月三十日ノ法則ヲ
以テ「ウシナ」ヨリ「ボン」マテノ鐵路一キロ

メートルニ付二萬佛ノ利潤ヲ保證セリ



以國鐵道里程表

鐵路類分	既開	建築中	建築見込	合計
北部	三〇〇六 <small>キロ</small>	一八六	四八	三、二四〇
中央	一、五八六	六六		一、六五二
南部	一、三二七	八〇	二四〇	一、六四七
極南部	六五一	四八八	一四五	一、二八四
小路	五六	二五二	九七	四〇五
撒丁島	一五二	四六	一九〇	三八八
惣計	六、七七八	一、二一八	七二〇	八、六二六

極南部ハカラボロ及シシルノ鐵道ニシテ政府所有ナレト南社ニ與シテ開行セシム
小路トハ諸郡内ニテ地方小會社ノ有スルモノタリ

以國鐵道建設入費表

平均	小	撒	カラボラ及ヒ シシール鐵道	南部鐵道	中央鐵道	小	政府鐵道	北部鐵道
同	同	同	同	同	同	同	同	每一キロメートル
二〇〇、六一四	七二、七二七	一一八、四二一	一八、六四四	二五三、六四二	二九七、四四三	一五三、六二一	四六四、〇八一	三五二、七九九佛

以國鐵道入金表 千七百十二

總計	トリノヨリ リボリマテ	トリノヨリ ミリエマテ	撒丁島	南部會社	中央會社	北部會社	類分	鐵路開業里程	入金	營業入費	利	潤
六、七五三、六五八二	一一一	一一一	一五二	一九七六	一五八六	三、〇〇六	總程	平均	合計	每	合計	每
一一三八、四三三、九八	九、七、八〇	三、七、三、七、七	六、〇、七、八、七、九	三、三、三、三、三、三	三、三、三、三、三、三	七、七、〇、三、七、一、六	平均	合計	每	合計	每	合計
七〇、四、五、四、九、三	七、七、三、一	一、五、一、〇、八	四、六、〇、五	一、三、〇、〇、九	一、四、五、七、二	二、六、二、七、一	合計	每	合計	每	合計	每
五、三、四、七、八、〇、六	五、四、三、〇	六、九、一、六	八、〇、〇、〇	八、八、〇、九	九、四、八、五	二、二、七、六、六	合計	每	合計	每	合計	每
三、三、〇、一	三、三、〇、一	八、一、九、一	三、三、九、五	三、三、〇、〇	五、〇、八、七	一、三、四、八、五	合計	每	合計	每	合計	每

年未
所算

以國鐵道記事

海國博覽會事務局

平均

二八八五

一〇七一

八二〇五

凡例 里程ハキロメートルヲ以テ算シ金額ハフランクヲ以テス

平山成一郎 譯

澳國西北鉄道記事

澳國西北鐵道建築ノ始末及近狀

第一 鐵道建築ノ企立及免許

獨逸國南北相通鐵道ノ掌管局數箇ノ銀行ト社
ヲ結ンデ左ノ事ヲ請負ヒタリ

維也納府ヨリツナイン、イグラウ、ドイナブ
ロード及コーリン、ヲ經テパルシュビツ、
マデ鐵道本線ヲ作り、ツナイン、ヨリ支線ヲ
作りテ、フランツシヨーゼフ、鐵道ニ相會ス

ル事

又コーリン及ユングツラウノ間ニ支線ヲ
作リテ、トランテナウ、ニ達スル事

右會社ハ千八百六十八年ヨリ既ニ此鐵道建築
ノ免許ヲ得シヲ澳國政府ニ請ヘリ千八百六
十八年七月一日議院ノ決議ニヨリ同九月八日
皇帝ノ詔ヲ以テソノ免許ヲ與ヘ營業期限ハ鐵
道開業ノ日(千八百七十二年)ヨリ九十年間ト定メ
建築資本金ハ一マイルニ付九十八萬五千フロ
リシテ限トシ政府ハ此金額ヲシテ毎年五分ノ

利アラシムベキヲ保證スルヲ約定セリ會社ハ
建築中及開業後九年間ハ歲入稅及發行證券ノ
證印稅ヲ除セラレ且其運賃ハ左ノ定額ヲ最高
限トシテ正金ニテ收受シ紙幣ナレハ相場ノ差
ヲ加フルヲ許サレタリ

旅客每一里

- 一等 三十クライツ
- 二等 二十五クライツ
- 三等 十五クライツ
- 四等 九クライツ

但疾車ニハ必ス二等ノ車マデ付附スベク運賃ハ二割ヲ増スヲ許ス

荷物每一里

- 一等 一フロ九十五クライツ
- 二等 二フロ二十五クライツ
- 三等 三フロ

全車皆積ム時ハ例外ノ規則トシテ左ノ運賃ヲ定ム

- 麥及鹽 一フロ五クラ
- 材木薪料 一フロニクラ
- 炭石金屬類 一フロ

第二同 一フロ四クラ 一クラ 八十クラ

第三同 一フロニクラ 九十クラ 六十クラ

其上同 一フロ 七十クラ 五十クラ

荷物ノ運送ハ此外一チエンド子ル毎ニニクライツヲ課スルヲ許ス即積卸及注意ノ料ニシテ若自カラ積卸ヲ爲ス者ハ唯一クライツ半ノ税ノミヲ出スベシ

會社ハ株證券及預證券ヲ發行スルヲ許サレタリ然レモ其利金ノ惣額ヲシテ政府ヨリ保證セル金額五分ノ三ヲ過キシムルヲ許サス(義務簿中ニ之)

スナ記)

會計

政府ヨリ保證セル鐵路惣程八十二マイル五、ソノ資本金ノ惣計八千二百二十六萬二千フロラント定メ其中建築入費三千六百萬ハ株證券ヲ以テ之ヲ集メ餘ノ四千四百三十一萬ハ預リ證券ヲ以テ之ヲ集ム

鐵道ノ通商工作ニ干係スルノ輕重

此鐵道ノ通商工作ニ干スルノ重キハ唯其線路ノ方向ノミヲ見テ以テ之ヲ知ルニ足ルベシ北

獨逸國ト澳國トノ通路ヲ増シ且内國產物ノ流通ヲ易フシ大ニ國富ニ益スルナリ此道開ルヨリ澳國ノ中心ハ北海バルナク海伯林「ハシブルグ」ブレームン「ドレンスデン」等ノ大都會ト相通シ洪葛利所產元質品ノ獨逸國ニ適スベキ者ハ大ニ輸出ヲ益セリ然ノミナラス東部ノ貿易モ亦一ノ捷徑ヲ得タリ

會社組立ノ大綱

會社ハ政府ニ四百萬フロランノ抵當金ヲ出シテ以テ諸種ノ義務ヲ行フベク就中開業ノ期ヲ

誤ラサルヲ保證シ政府ハ又會社ノミナラス巴里及維府銀行等ヨリ資本金十分ノ九ヲ出スノ約定堅固ナルヲ明知セシカバ千八百六十九年九月八日終ヒニ免許狀ヲ公布セリ其後會社ハ速ニ建築ニ着手シ專ラ義務簿所定ノ期限内ニ工事ヲ竣ルヲ務メタリ

技術課ノ編制

會社組立ノ時ニ方リテハ鐵道筋唯早卒地均ヲ爲シタル場所或ハ建築見込ノ大畧ヲ立テタル場所數處アリシノミニテ曾テ明細ノ見積リナ

シ故ニ先ツ土地ヲ固フスルノ工業ヨリ手ヲ起シ且諸方一齊ニ土功ヲ始メ定期中ニ業ヲ了スルノ基本ヲ定メザルヲ得ザリケリ

建築ノ始末

鐵路惣程建築ノ大綱見積書ハ千八百六十八年十月ノ末之ヲ貿易事務省ニ呈セリ同年十二月ヨリ次年一月ニ及ビ鐵路ノ方向ヲ定シガ爲メ政府ヨリ技術上及軍用上ノ利害ヲ檢査シソノ承可ヲ受ケタリ建築明細見積書ハ千八百六十八年ヨリ次年ニ及ビ冬季中ニ之ヲ作りテ該省

ニ呈ス五月ヨリ六月ニ及ビ鏡路程中「モラビヤ」
 及「ボヘミヤ」管内ニ渉ル部分即六十里程本州地
 方官及政府技術士ノ検査ヲ受ケ其後建築着手
 ノ許可ヲ得テ第一至難ノ場所ヨリ業ヲ起シ以
 テ成功遅延ニ至ラザラン「」期セリ下澳地利
 州管内ニ渉ル部分ノ検査ハ秋収後ニ至リテ漸
 ク之ヲ終へ此處ニテ又本建築着手ノ許可ヲ得
 テ速ニ工ヲ起セリ
 建築所用ノ鏡線ノ數最初ノ年間既ニ百万ナエ
 ントナルニ及ビ自國製作所ノミニテハ其用達

シ難キヲ以テ之ヲ外國ニ命シ半額ハ英半額ハ
 佛ニ於テセリ車其他ノ器具ニ至リテハ獨澳二
 國ノ大製造所ヨリ多少買取セサル所ナシ
 此建築請負人頗ル多カリシカ維府「シヨール」
 ヲビユール「」氏ノ請負方尤便宜ナリケレハ會
 社其事ヲ同氏ニ委シ千八百六十九年四月三日
 終ニ條約ヲ結ヒタリ其大意ハ同氏總テ地上地
 下ノ工業ヲ擔當スルノミナラス所用品ノ給與
 所用地面ノ買取ヲ引受ケ又定額外ノ利子及開
 業マテ會社支配方ノ雜費ヲ引受クベク右ノ爲

メ五千六百七十万フロリンノ金額ヲ受クベシト
ナリ本定約ハ免許狀ノ所定ニ從ヒ政府ノ許可
ヲ乞ヒタル後千八百六十九年五月二十三日賀
易事務執政ノ決定書ニヨリテ承可セラレタリ
「ビューヘル」氏ハ都テ豫備ノ工業及官司ヨリ相
當ノ處置アルハ必要當然ナルヲ予認シタル
後所定ノ積蓄ニ基キ且會社所任ノ工事管督課
ノ指令ヲ奉シテ建築ノ業ニ着手セリ工事管督
課ハ所要ノ地所買取ノ照管、物品買取ノ監察、營
業ノ爲メ所要ノ物品買取方鏡橋建築監察ノ專

務等ヲ擔任セリ千八百六十九年ノ末ヨリ此役
ニ服スル工人ノ數二万ニ過キ千八百七十年ニ
ハ四万人ニ及ベリ又此建築ノ爲メ用ヒシ諸鏡
道ノ里程二万八千二百五十メートルニ及ベリ
於是工業ノ進ムト甚速ニシテ「コリンゴル」エニ
カウ」ノ道筋四里十分一ハ千八百六十九年十二
月六日之ヲ開業セリ即免許ヲ受ケテヨリ僅ニ
十五ヶ月ニ過キス是ヨリ以後西北鏡道ハ澳國
開業鏡道中ニ列ス多惱河上ノ橋ハ千八百七十
一年ノ夏建築ヲ始メ七十二年二月落成セリ維

府會館ハ七十年九月工ヲ起シ七十二一年一月一日之ヲ開キ同年七月一日ニハ西北鐵道ノ惣程全ク開業セリ即三年十月ヲ以テ全ク竣功シテ義務簿所定ノ期限ヨリ早キヲ二年ナリ右鐵路ノ方向左ノ如シ

甲 維府ヨリ、ユリン、ユングブンツラウ

四十六里、五

乙 グロツスウオルセツクヨリバカバルンニ

二十里、八

但ライソンホーフヘルニア
ライソンハイトノ支運共

丙 ドイナブロードヨリバルンニ
十二里、五

丁 テレルンドルフヨリシグムンシユルベル

二里、七

合セテ八十二里五

鐵道既ニ開業セシ後ハ大綱ノ工業全ク了シ殘ル所ハ唯維府瀋車會館中ノ小建築ノミニテ此小工業ハ會社自己ニテ爲スヲ便トセシカハ即テ請負人ト惣會計ヲ清算シ全ク條約ヲ解キタリ

建築ノ爲メ採用セル規則

鐵道建築技術上ノ事件ハ獨逸鐵道社中ノ所約ニ遵ヒタルノミナラス又最新最好ノ工夫方法ヲ悉セリ

土地買取ノ事

會社ハ土地買取課ヲ設ケテ鐵道所用ノ土地不動産ノ買取等ニ于スル事項又此建築ニヨリテ他地主ノ權ニ害スルノ償金ニ于スル談判、會社新得地所有ノ權利ニ于スル事項等ヲ一切擔任セシム又新得ノ土地家屋ニ付テ出スベキ稅額

ノ決定方及之ヲ會社ノ別簿ニ記入スル等モ其任タリ
土地代價ハ附表ヲ見ルベシ

地下ノ工業

鐵路惣程地下ノ工業ハ堅固ニシテ危險ナラザルヲ保スベシ大抵ソノ線路ハマシハ山及モラビヤ、ホヘミヤヲ境スル山脈ノ餘波アル地ヲ過ギ大理石質ノ地ニ通スルモノ多シ唯北方ノ線路中ニハエルブ河邊ノ脆土多キ部アリ此土ハ崩頽ノ患アル者ナレバ皆線路ノ方向ヲ改正シ或ハ豫メ水ヲ去リ以テ後患ヲ防ケリ前ノ如

キ地質ノ場所ニテハ直ニ工事ニ資用スベキ材
 料多クシテ甚便利ヲ得タリ土堤ノ切斷圖ニヨ
 リテソノ幅ノ廣ヲ見バソノ堅固ノ證タルヲ知
 ルベシ最初ハ鐵路ノ惣程皆一道ノ制ヲ用ヒシ
 カ未タ晚ラザルニ及ンデ後來二條ヲ布クベキ
 時不便ナキ爲メノ豫備ヲ爲セリ橋梁其外皆後
 日二道ヲ布クニ足ルベキヲ料リテ之ヲ作レリ
 土地買取ノ時モ又後日二道ヲ布クベキ時ハ速
 ニ有用ノ地ヲ獲ベキノ手段ヲ爲セリ此等ノ專
 ハ義務簿ノ所定ニ過ル餘分ノ處置ニシテ後來

營業繁盛ニ趣ク時立ロニ道ヲ廣メ得ベキノ備
 ナ爲シタルナリ唯トランテナウ筋ハ橋路皆一
 道ノ制ヲ用ヒタリ其故ハ該地方ノ繁華重要ナ
 ラサルニヨレリ都テ道幅ハ横木ノ高サノ處四
 メートルニシテ堤ノ沙敷〇メートル四ナリ堅
 道ハ石質ノ土地ニ於テハ傾一フース或一フー
 ス半又軟石地ニ於テハ一フースノ三分一或二
 分一二至ル堅石地ニ於テハ壁障ヲ直角ニ作り
 又一層深キ地ニテハ傾度五分一ヲ以テス岩石
 ノ鑿道深サ七メートルニ過ル者ハ幅八メートル

ル其以上ハ九メートルトス濕地ニ作りタル鑿道ハ壁障ノ崩頽ヲ防クカ爲メ特別ノ工業ヲ爲シテ以テ之ヲ支フ凡ソ傾一フース乃至一フース半壁障ニハ水草ノ種ヲ下シ又柵柵ヲ作レリ平地ニ作ル鑿道ノ壁障ハ側ニ松杉ノ類ヲ種エ或土ヲ積ミテ雪ヲ防ク總テ土地鑿開ノ時發見セル石材類ハ皆之ヲ資用シテ捨テス河水ノ方向ヲ改ルニハ其水勢ノ富ル堤防ヲ沙敷草敷或材木ニテ蔽護ス土堤ノ支壁ハ大小不齊ノ礫石或セメントヲ用ウ總テ橋梁ハ土製ノ支壁ヲ用

井又橋柱ノ遠近高低ニ應シ或石或鉄ヲ用井テ其上ヲ固フシ唯二メートル以下ノ鑿道ノミハ木材ヲ用ウ鉄路ト他ノ街道トヲ結ビ合ハスル橋梁ハ都テ土製壁ヲ用ウレモ高築ノ工業ハ只國道及其他國道ノ如ク緊要ナル道ノミニ限ル且此道ニハ鏡石ノ建築ヲモ爲シタレモ他ノ街道ニハ木材ノミヲ用ヒタリ橋梁ノ高四メートル以下ノモノハ平行ノ翼壁ヲ附シソノ以上ハ外敷ノ翼壁ヲ附ス本堤ト此翼壁ノ附ケ合セハ草敷或沙敷ヲ以テ之ヲ爲ス

地上ノ土功

西北鐵道ノ地上土功ハ重百四十ナエント子ル
 ニシテ毎時七十五キロノ速力アル機關車ノ爲
 メ之ヲ作ス鐵線ノ重サ一フースニ付二十二斤
 即一メートルニテ六ナエント子ルノ比例ナリ
 横木ハ務メテ各地ノ所産ニ應シ最上ノ松材ヲ
 用ウ杉ヲ用井タルハ例外ナリ轉道法ハ英風ヲ
 用井其副鐵線及橋上ノ建築等ハ皆堅固ノ木ヲ
 用ウ鐵道筋柵材少キガ故ニ横木等ニハ松杉ヲ
 用井柵材ハ儲ヘテ以テ後日ノ用ニ備フ周圍六

百メートル以下ノ曲路ニハ鐵線附接スル處ノ
 中央ニ支柱盤一箇ヲ置キ都テ横木ノ凹處ハ兩
 面釘附方ヲ用ウ周圍三百メートル以下ノ曲路
 ニハ又各横木ノ上ニ支柱盤ヲ附加ス惣程ノ會
 館六十八ニシテ停車ノ地六所トス其地上土功
 ノ費用左ノ如シ

第一 横木

製造所倉中ニテ買フ一本平均	一フロ五
轉道場所ノ横木	一フロ
柵材ノ横木一メートル立方	五十四フロ

第二 鍊線

鍊線 一メートル
キヤンタール

到着會館ノ價七フロ五十

側附板

八フロ六十四

半圓形ノ栓

十三フロ二十

釘

十二フロ三十三

第三 尋常轉道器五メートル五

轉道器一具
支木号柱一切

四百八十フロ

支柱盤

五百二十フロ

第四 二重轉道器十一メートル

尋常轉道器二具
附屬品共

千百九十フロ

同

千三百フロ

第五 英法轉道器

一具
但尋常交叉道及附屬ヲ除ク

三千百フロ

第六 縱木附ノ交叉道

一具
角度四十五度四十五分、
二十五度四十四分、
八度四十四分、

二百〇九フロ

同 七度四十六

二百十三フロ

同 二重交叉道
十度五十五

九百三十フロ

同 直角

三百十六フロ

第七 特別ノ縱木

尋常轉道器

九十フロ

轉道器支注盤共

八十五フロ

同 二重

七十五フロ

第八 旋轉盤

旋轉盤一箇但四メートル六
但土臺等ヲ除ク

二千フロラン

同 一箇六メートル

千八百八十七フロ

同 十二メートル

七千フロ

第九 運送手車

一輪

千百十フロ

第十 旋轉轆轤器

一箇重二百ナエン
トチル

四千四百三十

同 六十ナエン倉庫用

七百フロ

同 百二十ナエン

三千五百フロ

同 壁ニ附セルモノ

五百

第十一 龜形天秤

一箇 臺鉄製

千八百フロラン

第十二 土功用雜具

一具

百八十八フロ

圓天井ヲ作ル機械

四百フロ

車

二百六十五

第十三 地下土功

一メートル

六十五クヲ乃至七十クヲ

高築ノ工業

總テ層高建築ノ業ハ務メテ實用ヲ主トシ華美ノ虚飾ハ全ク之ヲ省ク故ニ會館ハ旅客及荷物ノ受付便利ヲ第一トスルニヨリ各館ノ房室分賦左ノ如シ

受授局

荷物倉

園

井

尋常番屋

二重番屋

大會館ニハ此外荷積槽梯、荷車、旅客用ノ炭倉又獸圈、荷積用ノ轆轤器、疾車ノ荷物倉、荷物掌管局アリ
又水ヲ給スルガ爲メ設ル、會館ニハ轆轤及溝渠アリ機關車ヲ換フルノ會館ニテハ機關車倉、石炭倉、石炭積込槽梯、旋轉盤アリ最後ノ會館及換車會館ニハ氣車倉、暖爐倉、役吏ノ宿所、及氣車附役吏ノ宿所ヲ設ク其ノ家屋大小ハ路ノ遠近地

ノ輕重ニ應スルハ論ヲ俟タズ建築ニ用井タル
 材料ハ各地ノ質ニ應シテ異同アリ下澳地利ニ
 テハ煉火石多キガ故ニ多ク之ヲ用井其他ノ地
 所ニテハ土臺壁障窓戶緣側等多ク花剛石ヲ用
 井他ハ煉火石ヲ用ウ大抵煉火石ヲ用ルヲ常ト
 ス之ヲ欠ク地ニ於テハ亦白堊ヲ用井又粗造ノ
 土塗ヲ用井タレモ土臺ハ皆石ヲ用井タリ

會館

會館ハ地方ノ輕重大小ニ應シ四等ニ分ツ其區
 分方ハ就中地方居民ノ便宜事務ノ狀態及役吏

ノ數ニ基クテ主トス又食時ニ當ル會館ノ外ハ
 道線分岐スル所及大都府ヲ距ル若干ナル地ノ
 外ハ割烹店ヲ置クベカラストス都會ニ接近ス
 ル地ニハ之ヲ置カスシテ以テ其地營業ノ者ニ
 委ス會館ハ務メテ貨物及營業ノ便ヲ先ニシ設
 ル者ニシテ役吏宿所ノ便宜ハ後ニシタリ
 故ニ會館中ノ平屋ニハ一ノ大ナル空庭ヲ設ケ
 此ニ荷積及乘車ノ切手ヲ賣ル處アリ待合所ハ
 勿論會館ノ大小ニ應ス唯四等ノ小會館ニ於テ
 ハ空庭ヨリ直ニ待合所ニ入り此處ニテ切手ノ

賣買貨物ノ受與ヲ爲ス空庭ヨリ待合所及割烹
 店ニ入ルニハ或ハ廊下ヲ經ルアリ又ハ之ヲ欠
 クモノアリ大會館ニテハ又一等二等客人ノ爲
 メ別ニ漱櫛堂ヲ設ケテ待合所ト相通ス中庭ノ
 側ニ餘地ヲ爲シテ以テ手荷物ノ番人或ハ門監
 ノ爲メ或ハ新聞紙烟草ヲ賣ルニ供ス都テ旅人
 ノ通行スル室ハ簡粗ニシテ專ラ實便ヲ主トス
 譬ハ木板ヲ附スル常人ノ長ケニ至ラシメ以テ
 損毀ヲ防ク壁ノ上部及天井ニハ淡泊ノ畫絳ヲ
 施シ必ス鏡道ノ圖ヲ掲ケ待合所ハ必ス庭ノ右

ニ當リ其前ハ大道ニ面シテ乘車切手賣所荷物
 切手賣所ヲ設ク左リニ電信局及營業局アリ唯
 小會館ニテハ右ノ諸局ヲ一室ニ合セ以テ一人
 ノ役吏數務ヲ兼任スルニ便ス大會館ニテハ會
 館長及各課事務毎ニ各別ノ場所ヲ給シ又諸會
 館皆燈檠什物倉厨庖役吏ノ居所ヲ附ス但シ地
 廣ク且入費少クシテ樓ヲ作り得ベキ場所ニテ
 ハ役吏ノ居所ヲ樓上ニ設ク平坦廣濶ナル地ニ
 ハ樓ナシ右居所ハ入口ヲ別ニシソノ家族等ヲ
 シテ旅客ト交接セサラシム役吏居所ノ爲メ所

要ノ地所ナキ地ニ於テハ別ニ役吏職工等ノ居宅ヲ建設ス

荷物倉

荷物倉ハ會館ト同一ノ方向ニ之ヲ造ル石多クシテ且深キ土臺ヲ要セサル地ニ於テハ石ニテ之ヲ作り其他ノ場所ニテハ木製トス壁製ノ荷物倉ハ外面ヲ石或煉火石ニテ蔽ヒ内面ハ高サ一メートル半マテ之ヲ蔽ヒ以テ硬物衝觸ノ損害ヲ防ケリ又右ノ高サマテ木板ヲ張りタル場所ハ之ヲ製スルニ堅固ナル柱ヲ以テシ柱ト柱

トノ間ニブリスノ厚板ヲ横ニ張り込メ以テ物品壓力ノ爲ニ矯揉セラレザルヤウ防ギタリ床ハ一メートル平方ニ付十五センチトチルヲ載スベシ何レモ滑轉戸ヲ用ウ其方或ハ下ニ條鏡ヲ布キテ其上ヲ滑轉セシムルアリ或ハ上ニ條鏡ヲ附シ圓筒ヲ以テ之ヲ釣ルアリ維府會館ニテハ各倉ニ轉運器一ヲ附シ鏡線ノ上ニ之ヲ置キ斜メニ街道ニ至ル此方ニヨル時ハ三十ケエントチルノ重荷モ直ニ之ヲ瀛車ヨリ荷車ニ積ミ換ルヲ得ベシ貨倉モ亦四級ニ分ツ即四等ハ

幅五メートル三等ハ八メートル二等ハ十メ
トル一等ハ十二乃至十六メートルトス長ハ一
様ナラス八メートル毎ニ一戸ヲ附ス各倉ノ左
右ニ荷積堤アリ床ト高ヲ同フシ鐵道ニ面ス
ル方ハ全ク屋根ヲ設ケテ鐵道ニ至ル一等及二
等ノ荷物倉ニテハ局二所線廊一所アリ三等ハ
局一所ヲ有ス四等ハ之レナシ雜府ニテハ貨倉
ノ側ニ別倉ヲ設ケテ局トス一ハ荷物積出ノ爲
メ一ハ荷物引渡ノ爲メトス税局モ亦此中ニア
リ

荷積堤

貨倉ニ接スル所又此ト同シキ長サノ堤ヲ築キ
多クハ土製ニシテ上ニ通路ヲ設ケ或ハ小會館
ノ如ク木製ニシテ上ニ石柱ヲ立テ且小屋掛ヲ
設ク土製ノ荷積堤ハ善キ礫土ヲ以テ製スル壁
ヲ用ウ

貯水會館

大抵白鐵製ノ貯水桶徑四五メートルナル者二
箇アリ高サ二メートル八ニシテ四箇ノ壁ヲ以
テ圍ミタル四角ノ臺上ニ設ク即四壁ト且中央

ニアル二柱トテ以テ之ヲ支フソノ一柱ハ水ヲ
桶中ニ引上ルニ供シ他柱ハ水ヲ外ニ流出スル
爲メニ用ウ兩桶内部相通セシムルカ故ニ二水
常ニ同平ヲ存ス大抵水ハ蒸氣機械ニテ井中ヨ
リ之ヲ桶ニ引ク井ハ常ニ屋ヲ距ル四メトトル
ノ地ニ於テスソノ故ハ井工ノ時日ヲ要スル甚
タ長キヲ以テソノ間家屋及水桶ノ建築並ヒ行
フテ相妨ルナカラシムルニ便ス其水量ハ現時
入用ニ應スルノミナラス後來營業益盛大ニ趣
キタル時ノ所用ヲ豫察シテ以テ之ヲ定メタリ

道筋水ニ乏キ地多ク旱災ノ時ハ用テ欠クノ思
アルカ故ニ豫メ之ヲ察シ最初ハ貯水會館二十
七所トセシテ後三十四所ト改メタリ其外又此
件ニ付意外ノ費アル工業モ少ラサリケリ

車倉

車倉ハ都テ方形ニ造リ二三四道ヲ附ス皆二重
ノ出口ヲ設ケタリ唯維府ニテハ半圓形ヲ用ウ
大抵戸毎ニ機關車二箇ノ比例ナリ四道ノ處ハ
五車ヲ列シ又數道アル車倉ニテハ倉ト工場ト
後面相接セシム車倉ハ皆石或煉火石ヲ以テ築

ク内外トモ窓ノ高サマテハ壁ヲ用ヒ轉道ノ渠
 ハ内面ハ煉火石外面ハ石ニテ造ル床ハ齊整ノ
 モエロン、セメント石灰ヲ以テ疊ム車ヲ洗フ爲
 メ用ウル水ハ管ヲ以テ之ヲ引ク此處ヲ温ルニ
 ハ大暖爐ヲ用井又機關ニ必用ナル砂ヲ乾カス
 ニモ之ヲ用ウ

番屋

- 道上單一ノ番屋 三百五所
- 會館中同 五十四
- 二重番屋道上 二

同會館中

六十九

四重番屋

一

合四百三十一

室四百九十

單一ノ番屋ハ室一間廚一所書室一間穀倉一所
 地窖一所壁ノ厚サ三十二センチメートル窓戶
 ハ直ニ窓ニ附ス各所別ニ一屋ヲ附シ圍倉獸圈
 トス又井一箇ヲ附ス二重會館ハ此ノ所記ニ倍
 シ且食器房アリ又地ニ應シテハ道路監者ノ爲
 メ居所ヲ設ク都テ番屋ニハ粗樸ノ家具ヲ附ス

工人工銀

地上ノ土工ハソノ地方材料ノ多少ニ應シテ異
同アリ工銀ハ維府ヲ去ルノ遠キニ從ヒ漸々減
少ス今其平均ヲ示ス

壁工石工

軟土ノ掘リ浚ヒル立方	〇五十クラ
石土 同	一フロ
乾石灰ヲ用ウル土臺ノ工事	六フロ三十
地窖ノ壁工	七フロ
水石灰ヲ用ユル土臺ノ工事	十八フロ
一階以上白堊ノ工事	十フロ六十

天井ノ壁工

十一フロ七十

厚板ノ壁工

三十三フロ

歩徑ノ石鋪 齊整ノモエロン

一フロ八十

空庭ノ石鋪

四フロ

地下ノ楷梯

二フロ四十

匠工

杉木 一立方ノ工銀

二十五フロ十

松

三十三フロ五十

屋根用ノ未製品

八十クラ

同 製品

一フロ十

屋根最頂用品雜附

一フロ十

鍍工

折釘トチエ

十五フロ三十

鋪掛ケタル支柱盤同

十三フロ八十

螺旋 同

十八フロ五十

大戸ノ附属品一枚分

二十六フロ

横戸 同 同

十六フロ

内部横戸二 同

九フロ五十

同 一 同

五フロ二十

二階下ノ窓四翼

七フロ

同 内部 同

六フロ二十

一階窓外面

四フロ七十

一階窓内面 二翼

四フロ

鍍窓トチエ

二十五フロ

荷物倉門戸用 同

三十フロ

機關車倉ノ暖爐

二十六フロ三十

塗師

平滑油塗ノ壁工一平方

五十五クマ

木理模擬ノ塗工

一フロ

屋根

黑石板ノ屋根 二フロ半
不燃原紙ノ屋根 一フロ十

鉛工亞鉛工

水溝 一フロ四十五
緣側等ニ用ウル亞鉛小具 三フロ八十
外葺ニ用ウル亞鉛 三フロ二十

指物師

兩扉ノ戸 三十一フロ五十
同 道上 二十六フロ
内戸兩扉 二十三フロ五十

内 雙扉 十一フロ五十

二階下ノ窓 十七フロ五十

同 雙階 十二フロ八十

尋常單一ノ隔障 三フロ

櫛木床柱頭ノ裝飾 四フロ六十

右床ノ支木及附屬物 一フロ十五

鉋掛ケタル床板障及床下 一フロ七十

同 支木ナ 一フロ二十五

車倉戸 八十フロ

荷物倉ノ戸 二十七フロ

硝工

尋常硝板

一フロ四十

二重同

二フロ六十

四重同

五フロ八十

建坪地價

ト一、一平方

一等會館

百二十フロ

同

二等

百フロ

同

三等

百三フロ

同

四等

百六フロ

同

五等

百二十六フロ

外廊	ト一、一平方	木柱	三十五
一等圍	ト一、一平方	木石	二千フロ
役員居所	ト一、一平方	二階	百四十六
僕夫同		二階	百八十五
荷物倉	ト一、一平方		三十六
荷積堤			四フロ
同	石柱		五フロ
貯水會館	(機關除之)	二階	七千八百
炭倉			十八フロ
機關車倉			三千五百

同 客車倉	七百
同 工場 <small>一ノ</small> 平方	二十
同 材料置場	四十ノ口六十
番屋 動不動產附	千六百五十
井	四百五十
大會館ノ水渠工事	一万二千
一等會館同	四千
二等乃至三等同	二千
四等同	八百
五等同	百八十

貯水會館

一等水桶	三千
二等同	二千七百七十三
三等	千〇五十一
直形蒸氣罐	八百
橫形同	六百九十
抽水機	五百六十
同 四等	二百三十
水管	四百五十
直形分水管	五ノ口八十

抽水機用貯水場	十八
嘴子	八十
抽水機	百〇五
水管 徑十センチ 八十センチ	七
同	四
貯水會館一所 機器二	一万二千二百一
二等同	一万〇百
三等同	八千八百八十
四等同 管七寸 管七寸 一箇及木	二千四百六十

道路ノ區分、開閉方

惣程ヲ分ツテエクトメートル、キロメートル、マイルトシ標柱標石ヲ以テ之ヲ表ス水平ノ高低ハ特別ノ標識ヲ設ク其板ハ亞鉛ニテ數字ハ高彫ニシテ見易キ色ヲ用ユ最モ獸ヲ牧スル多キ地方ニテハ特ニ墻垣ヲ設ケ平地ノ水平ト鑛道トノ高差一メートル二十五ナル所ニ於テ又會館ノ側ニハ墻垣ヲ設ク鑛道ヲ横過スル通路ハ旋轉或上下柵ヲ用ヒテ之ヲ開閉スソノ方ハ柵ト鑛路トノ間ニ馬車一輛ヲ容ルベキノ距離ヲ存ス故ニ八メートルヨリ減スルヲナシ又旋

轉柵ノ代リニ引戸柵ヲ用ウルアレモ極メテ少
シ元來鏡道ヲ距ル十二フースヨリ少キ地ニ柵
ヲ置クベカラザル規則ナレハ高低ノ差一メー
トルノ場所及同平面道幅四メートルノ處ノミ
ニ之ヲ用ウ

標識及柵門ノ價

度標一切	七フロ
半面板	一フロ六十
キロメートル標石	五フロ
マイル標石	六フロ

柵

引戸柵一切	四メートル	三十六フロ
旋轉柵一切	四メートル 五メートル	四十フロ
同	六メートル 十メートル	九十七フロ
同	上下柵最大ナル者	二百四十八
同	上下器	十七
一切	揭示表	十五フロ
垣戸		
障戸	鉤ノチ加ヘタル モ但會館用	二フロ三十

九材	八十クラ
屏遮ナキ垣	四十クラ
屏遮アル垣	七十クラ
同戸幅八メートル一切	百十フロ
同	四メートル
同	五十六フロ五十
同	四十五フロ五十
出口	一メートル二十五
燈提杭	十八フロ七十五
	十五フロ三十八

但番號附、亞鉛板、書字ノ價其中ニ在リ
電線

惣程ノ側ニ電線ヲ設ケ會館ノ往復及番屋ノ信號ニ用ウ之ヲ分ツテ三種トスベシ

第一 電信往復

各會館ニ此機械ヲ設ク其類三アリ

第一 發信局

第二 傳信局

第三 中間局及受信局

此區分ノ意ヲ明ニスルニハ先ツソノ距離ヲ知ルベシ此鏡道ノ如キハ里程八十三里ニ及ヒ加之支道多キヲ以テス故ニ之ヲ分ツテ數線トナ

サズンハ電信ノ往復順序ヲ亂シ易シ故ニ諸會館皆數線ヲ以テ相連接セシム

第二 電氣信號

諸番屋ニハ皆電氣信號ヲ設ケ善ク音ヲ發スル鐘ヲ附ス電信局ニ於テモ亦然リ中間會館ニハ小鐘二箇ヲ附シ其他附屬品ヲ添フ

第三 電氣報通信號

道路分岐スル處ニテハ五百メートルノ距離ニ信號ヲ設ケテ氣車ノ來ルヲ報シ以テ不虞ノ變ヲ避ク

前條諸費

中間會館	二百五十九フロ四九
同 支道附	四百六十一、二八
傳信局	四百七十六、二八
同 支道附	六百七十一、九二
腕木陶鐘四箇添	七フロ九十二
同 同 六箇添	九フロ八十
同 同 八箇添	七フロ二十
同 同 八箇添	十フロ四十
陶板九穴	六フロ

同	十四穴	八フロ七十
支木中鐘附		六十四クラ
同 小鐘附		四十クラ
電線一メートル		二クラ
尋常信號場尋常打鐘附		百六フロ六十
電氣盤二段		二十フロ三十
同 四段		三十六フロ八十
同小ハモニメント附		九十五クラ
同大		八十六クラ
番屋ノ鈴鐘一具一點		百十七フロ八十

同	四點	百三十三フロ三十
覺睡鐘		二十一フロ

車類

初年ハ機關車九十四箇、蒸氣車百八十三、荷車二千六十六ヲ以テ足レリトシタリ故ニ每里機關車一、一三二、蒸氣車二、〇二四、荷車二四、八九一ノ比例ナリ

機關車九十四箇ノ中三十八客車ノ爲メ、五十九ハ荷車ノ爲メ、五ハ薪水ノ爲メトス

客車ノ機關車ハ平車ヲ附シ、疾車ノ用ニ供ス、荷

津浦鐵道局
津浦鐵道局

車ノ機關車ハ六輪ナリ

薪水車ハ四輪ニシテ大會館又ハ支道ニ於テ豫

備ニ用ウ

客車ノ種類左ノ如シ

一等	十車	百八十座
二等	四十二	千百七十六
二等混入	三十八	八百三十
検査車	二	二十四
三等	六十七	三千十五
四等	二十四	千四百四十

計百八十三

五千二百二十五

平山成一郎 譯

旅客車價直表

Table with 18 columns (No. 1-18) and 5 rows (Number of passengers, Type, Purchase location, Unit price, Total price). Includes categories like '一等旅客車' and '二等旅客車'.

機関車價直表

Table with 8 columns (No. 1-8) and 5 rows (Number of passengers, Type, Purchase location, Unit price, Total price). Includes categories like '機関車' and '炭水車'.

荷物車價直表

Table with 20 columns (No. 1-20) and 5 rows (Number of passengers, Type, Purchase location, Unit price, Total price). Includes categories like '郵便車' and '荷物車'.

種別	金額	割合
第一 旅客	1,214,722.33	100.0%
第二 軍用旅客	1,023,643.30	84.3%
第三 手荷物運送	668,833.23	55.1%
第四 疾車運送	1,364,864.51	112.4%
第五 第一、二種旅客	2,188,021.02	180.1%
第六 雜入金	3,610,851.12	297.4%
第七 林業関係金	1,600.00	0.1%
第八 船舶関係金	12,113.35	1.0%
第九 雑入金	1,668,444.84	137.3%
第十 雑入金	440,364.85	36.3%
合計	1,214,722.33	100.0%

各種入金ノ惣入金高百分ノ割合及毎里ノ割合表ヲ左ニ載ス

種別	金額	割合
第一 尋常旅客及手荷物	3,610,851.12	297.4%
第二 軍隊旅客	2,188,021.02	180.1%
第三 疾車運送荷物	1,364,864.51	112.4%
第四 荷物運送	668,833.23	55.1%
第五 雜入金	3,610,851.12	297.4%
合計	12,147,222.33	1000.0%

土地買入費用表

州名	下 澳 地 利 州		合 計	モラセヤ州		ホヘミヤ州	
	雄府會館	他ノ道程		モラセヤ州	ホヘミヤ州		
マイルノ數	0.2	10.9	11.1	60.1	65.9	11.1	12.8
一マイル中ヨハノ數	33.9	33.9	33.9	56.6	56.6	40.7	40.7
全程中ヨハノ數	104.2	372.2	476.4	660.6	660.6	452.9	452.9
一ヨハ平均地價	112.30	274.7	460.5	98.1	98.1	199.8	199.8
地一マイルノ價		937.50	1957.13	555.72	555.72	822.70	822.70
價全程ノ價	170.11	707.18	877.29	647.91	647.91	904.97	904.97
雜一マイルノ費		91.63	135.64	99.74	99.74	99.70	99.70
費全程ノ費	515.14	998.63	1513.77	1156.98	1156.98	206.57	206.57
惣一マイルノ高		102.91	650.70	650.70	650.70	923.30	923.30
用全程ノ高	1221.6251	1214.7223	2436.3474	763.6141	763.6141	1015.635	1015.635

土 賦 買 入 費 用 表

合 計	一〇〇、四、七、五〇	四、五、二、一
第 五 蘇 入 金	二、一、一、二	一、六、七、一、五
第 四 許 勝 監 査	五、八、五、四、六	二、六、七、一、四
第 三 乘 車 監 査 許 勝	二、一、四	一、六、七、一、八
第 二 軍 制 監 査	〇、三、〇	二、二、七、四
第 一 尋 常 監 査 及 手 許 勝	三、六、五、〇	二、五、一、一、六
入 金 入 蘇 賤	百 金 入 階 合	每 里 入 階 合

各 蘇 入 金 入 蘇 入 金 高 百 金 入 階 合 及 每 里 入 階 合 表 下 表 二 條 又

中 亞 細 亞 鐵 路 說

佛「イリユストラーション」新聞拔譯

中央亞細亞鐵道ノ事

千八百七十三年七月へエルゲナン、レセブス氏
ハ巴里府地理社會議ノ時亞細亞鐵道建築ノ議
ヲ呈シ且此大業ヲ成スニ自ラ至便ナリトスル
線路ノ方向ヲ示セリ然ルニ同氏ハ嘗テ蘇西溝
開鑿ノ舉ニ於テ大ニ才畧ヲ著シソノ創思スル
所人皆之レヲ重ンズルヲ以テ今度中央亞西亞
鐵道ノ議ニ於テモ世ノ學者商工皆耳ヲ側テ、
其說ヲ聽キ精ヲ竭シテ其事ヲ研究シタリ

レセア氏ノ説ハ一人ノ之レヲ非トスル者ナシト雖モソノ示セル線路ノ方向ニ至リテハ一人ノ之レヲ可トスル者ナシ各國ノ新聞家鐵道ノ事ニ長セル輩ソノ線路ノ奇異ナルト又同氏ノ地理社中ノ議席ニ於テ説述シタル事條ノ不確ナルヲ批判セリ

今此ニ附スル圖ハレセアス及ユタール兩氏ヨリ維府博覽會總裁バロンシユワルツ氏ニ呈セル者ニシテ其原圖上ニ此草圖ハ千八百七十三年七月四日レセアス氏ヨリ巴里府地理社中ニ

呈セル事件ヲ辨明スルニ供スト記セリ爾來右兩氏ハ其實地ノ形狀ニ於テ新タニ見聞スル所少ントセス而シテユタール氏ハ親シク最初創思ノ線路ニ誤處アル事ト并ニ之レヲ改正スルノ方法ヲ以テ我輩ニ告ケタリ

右ノ外外國刊行ノ著書等ニ就キ明細ノ報知ヲ得シ事多シ尤ザ、エルオーベルレグ、デル、ルツセ
ン、イン、ケエントラール、アジーイン、ダス、ルツシ
ーシエ、ナユルクスターン、ウント、デツスンベナ
ーフンゲレ、ツー、ドン、ナーヒバル、カナリータン

其中亞細亞記及魯領土耳及維府博士ホーフステツ
トル氏ノウーラル山說千八百七十三年四月四日維
府博學社ノ會議ノ時所陳
 ノ兩書ニ依ル第一書ハ伯林府書肆ミツトレル
 父子ノ家ニ第二書ハカル、ハイベルノ家ニ於
 テ刊行セリ今此諸報知ヲ世ニ公布シ以テ此大
 事業ヲ研究シ且大魯帝國ノ南東部ノ狀ヲ知ラ
 ントスル者ニ便ス
 先圖ニ就テレセプス氏ノ線路ヲ尋ルニ同氏ハ
 線路ヲシテ「モスコ」ヨリ「オーレンブルグ」ヲ經
 テ「オルスク」マテ延及セシメントス同氏此誤說ヲ

主張セルハ地理社會議ノ時發セル說中左ノ數
 行ヲ以テ見ルベシ

「カレ」ヨリ「カルキユツタ」ニ至ルマデ既ニ
 成就セル鐵路八千六百六十キロトス「オーレ
 ンブルグ」ヨリ「ペシアウル」マテ新築ス
 ベキ者三千四百七十キロトス合セテ万千
 七百キロ以テ歐洲ノ東端ヲシテ英領印度
 ノ東端ニ接セシムルヲ得ベシ

然ルニ今魯國ノ鐵道ハ現ニ「シスラン」府ニ止ル
 同府ハ「ボルカ」河上ニアリテ「オーレンブルグ」

及「カサリンスク」ノ間二百餘里ノ砂場絶テ飲水
ナキノ地ニ鐵道ヲ設ケントス此沙漠ヤ曾ツテ
商業若クハ鐵道發行ノ用ニ供スベキ産次アル
「ナシ」是魯國參謀官ノ報告書「レセプス氏」ノ引
用スル所ノモノ「ニヨリテ明知スベシ」「シル、ダ
リア」ノ河口「アール海岸」ヨリ廻ル「フ百里ニ及
バサレハ耕スニ足ルベキ地ナク又「シル」ダリ
「ア」河畔ノ地ハ上リテ「タナケンド」府ニ至ラザレ
バ饒腴ノ地ヲ見ス此府ハ魯領土耳其土但ノ都
府ニシテ人口十五万ニ至レリ「レセプス氏」ノ線路ハ

此都府ヨリ迤メニ河ヲ渡リテ「サマルカント」府
ニ抵ラントス此地ハ古時タメルランノ居府ナ
リシカ今其舊繁華ヲ失ヘリ此府ヨリ以往ハ人
ノ未ダ悉知セサルノ地ニシテ技術士ヲシテ「ヒ
ンツ」カウ「ナ」山ニ通スル隊商ノ通路ヲ探測セ
シメサルヲ得ス「ヒンツ」カウ「ナ」トハ比馬郎也
峯脈ノ西部ヲ謂フ「一タビ」カ「アール」ニ達セル後
ハ此鐵道ノ最後停車場トナスヘキ「ベシ」アウ「
ル」ニ至ル「フ」難キニ非スト右ニ述ル所ノ線路ハ
世人之ヲ可トスル者少ク此事業ニ尤干係アル

諸國即チ魯獨墮英皆異見ヲ發セリ而シテ各國皆自國ノ益タル線路ヲ主張スルハ自然ノ勢ナレトモ畢竟此事ヲ決スルハ魯國ニ在リ其故ハ魯國領ヲ經スシテ鐵路ヲ布ントスル時ハ其業甚難フシテ成ルヘカラサルヲ以テ也

第一 英國ハ其國ノ商船ノ航海ヲ盛シニセンガ爲メ此鐵路ヲ孔士且知府ニ對セル「スキユタリ」ヨリ起シ小亞細亞ヲ經テ「エルツエールム」「トーリス」テヘラン「メシエート」ヘラ「カンダバール」「ナカルプール」ニ至リ印度ノ鐵路ト相連接セ

シメン「チ」欲ス「スキユタリ」ヨリ「テヘラレ」マ「チ」凡六百里ニシテ波里斯ノ首府「テヘラレ」ヨリ「ナカルプール」マテ又六百里トス

此線路ハ諸國一モ可トスルモノナシ其故ハ線路ノ過ル所亞細亞土耳其及ヒ他ノ不開明ノ國多クシテ危險ノ「チ」ナキヲ保シ難キニヨリ財本ヲ出スモノ危懼ノ怠アルヲ免レヌ

第二 獨國人ハ波爾斯鐵道ノ請負人タル「バロシ」ロイトル氏ノ業ニ便セントノ意アルヲ以テ魯國鐵路ヲ延イテ「アゾフ」海ノ窮處「ドン」河口

ニ當ル「ロストー」ニ達セシメ又此路ヲ延イテ「コ
 ーカース」府ニ達セシメントス此府ハ「ナフリス」
 ノ北四十里ニ在リテ「コーガース」山脈之ヲ隔ツ
 「ウラヂェウカース」ヨリ「ペトロスク」ニ至リカス
 ビエンヌ海ニ沿テ「バクー」アスタラ「レヒト」ニ達
 シ此ニ於テ「バロン」ロイトルノ千八百七十三年
 九月創築シタル「テヘラレ」府ノ鐵道ト接セシメ
 シトス「ロスト」ヨリ「アスタラ」マテ三百里餘ニシ
 テ「アスタラ」ヨリ「レヒト」マテ僅々三十里是ヨリ
 「テヘラン」府マテ七十里トス

第三 奧國人及魯國人ハ英佛ノ線路ヲ好マサ

ルニ似タリ魯人ハ土耳其士但ト英領印度ト鐵
 道相通スルヲ喜マス大ニ支那ヲ經テ之ヲ築ン
 「ナ」欲ス支那ノ鐵路ヲ一タヒ設クレハ他國復
 タ魯ト抵抗スル者ナキヲ以テ也是ヲ以テ魯人
 ハ「オーレンブルグ」ヨリ「タナケンド」ノ鐵路ハ
 捨テ顧リミス同國ノ技術士輩皆「ニーニーフゴ
 ロート」ノ鐵道ヲ延イテ「カサン」「サラプール」「ベル
 ム」「エカタリンプルグ」ニ至ラシメント「ナ」建言ス
 「エカタリンプルク」ハ恰モウ「ラル」礦山ノ中心

ニ當レリ此所ヨリ北「チユーメン」ニ向ヒ「チユー
 メン」ニテ西別里鏡道ト相會セシメ他ノ一路ハ
 南「クールジヤ」ニ達セシメントス「クールジヤ」ハ
 三年前魯人侵掠セル支那領ノ都府ナリ此地ノ
 東ヨリ西ニ向ヒ「イリ」河アリテ其兩側葡萄煙草
 「インヂゴ」ヲ産ス其西ハ「バルカナ」湖ニ會ス「イリ」
 河ヲ遡リ支那領鞏州ヲ經テ遂ニ「カミ」カナンニ
 「シンガン」上海ノ諸府ニ至ラン「チ」欲ス
 此線路ハ魯人ノ競テ主張スル所ニシテ其理甚
 解シ易シ若シ路ヲ定ムル斯クノ如クナル時ハ

第一ウーナル山之金、白銀、鏡銅ノ諸礦アル地ヲ
 過キ次ニ礦山多キ西別理ニ達シ終イニ土地豊
 饒人烟稠密ナル支那領ニ至リ其便勝テ算スベ
 カラザルヲ以テ也此ノ本線ノ外「クールジヤ」ヨ
 リ一支線ヲ延テ「タナケンド」ニ至レハ後日唯「ヒ
 レヅ」カウチ山ノ荒地ヲ越ルノ難事アルノミ
 ニテ他ハ全ク功ヲ奏セルト謂フニ足ル之ヲ畧
 言スルニ「オーレンブルグ」ヨリ「シールダリア」
 河畔ヲ經テ「オルスク」及「ウーラル」ヨリ「エ」ニ至ラ
 ントノ線路ハ一人モ之ヲ可トスル者ナク其他

ニ至リテハ未ダ定論ヲ見サル也

五六年以來魯國技術士輩「ボルガ」河ト「ウーラル」山ノ間ニ當レル地百五十里乃至二百里ヲ探測シ魯國內部ノ鐵道ヲシテ「ウーラル」礦山ニ達セシムルノ最便線路ヲ探グリ諸般ノ目的ヲ立テタリ就中下ノ三案最モ公論ノ可トスル所ト爲ル

第一案ハ將官ラシエツト氏ヨリ出テ其線路ハ「ニーニ」フゴロトノ鐵路ヲ延イテ「カサン」ニ至リ「ボルガ」河ノ支流「カマ」河ヲ廻リテ「ベルム」ニ

至リ是ヨリ「ウーラル」山ノ側面ヲ經テ東方ニ向ハントス此「ウーラル」山ハ歐亞ノ堺ヲ爲ス者ニシテ平生圖上ニ就イテ之ヲ見ル時ハ險山ノ如シト雖モ其實ハ然ラス此山ノ最高峰水平ヲ離ル、六七百メートルニ過キス故ニ長遠ノ地道ヲ鑿開スルヲ須タスシテ容易ニ之ヲ越ルヲ得ヘシ此鐵道ハ「エカタリ」ンブルグノ北六十里ノ地ヲ經テ「ツ」ラ河畔ノ「チューメン」府ニ達セシメ「ウーラル」山ノ東方ノ後面ニ他ノ一路ヲ築キ「エカタリ」ンブルグヨリ發シテ「デミドツ」族ノ

所有タル「タゲール」ノ礦山ヲ經テ南北「クート」ニ至ラシメントス
 ラシエツト氏ハ元「デミドツフ」族ノ技術士ニシテ方今聖彼得堡礦山事務ノ長タリ
 第二案ハ大佐ボグダノウイツナ氏ノ創思ニシテ第一案ノ如ク「ニーニ」フオロート」ノ鐵道ヲ延テ「カサン」ヲ經過セシムト雖モ此道ヲ「サラアール」ニ止メ是ヨリ直ニ「エカタリ」ンブトルグ」ヲ經テ「ニューメン」ニ達セントス故ニ此線路ハ前者ニ比スレハ更ニ南方ニアリ

第三業ハリウビノツフ氏ノ說ニシテ亦「エカタリ」ンブ「トルグ」ヲ經過セシム唯此ヨリ「ケュー」ン」ニ向ハス東南「トポール」河ニ向ヒ「クールガン」府ノ北ニ於テ此河ヲ渡ラントス
 今此三案ハ皆熟慮シテ定ムル所ナレハ輕々ロシク其可否ヲ論シ難シ我輩以爲ラク後日「エカタリ」ンブ「トルグ」礦山ニ鐵道ヲ通シテ開採ノ業盛大ナルニ至ラハ前三氏ノ說並ヒ行ハル、ニ至ランカ我輩此說ヲ吐クモノハ方今現ニ「ウール」山ノ礦山ヲ開採セシヨリソノ近傍ノ商工

頗ル繁榮ヲ獲タルヲ聞知スルヲ以テ也今此ニ
亞細亞鏡道ノ事ヲ記スルノ際歐洲各國亦專ラ
本條ヲ討論講究セリ故ニ此大業ノ行ハルヽヤ
日ヲ期シテ俟ツベキノミ

平山成一郎 譯

